



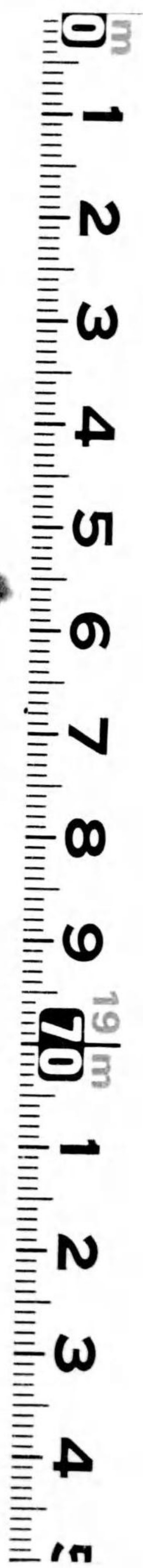
特107

568

日本最古ノ神道

~~269~~

~~632~~



始



特107
568

明治天皇御製

かみつよの御世のおきてを違へじと
 思ふぞおのがねがひなりける
 くにたみはひとつ心にまもりけり
 とほつみおやの神のをしへを
 しきしまのやまと心のをしきは
 ことある時ぞあらはれにける
 いとまあらばふみわけてみよ早振
 神代ながらのしきしまのみち
 天地を動かすばかり言の葉の
 まことの道をきはめてしかな

大正
1.10.21
内交

五十鈴川清き流の末くみて

こゝろを洗へ秋津嶋人

今の世に思ひ比べていそのかみ

ふりにし書をよむぞ樂しき

白雲のよそに求むな世の人の

まことの道ぞ敷島の道

分けばやと思ひ入ぬる道にこそ

高きしをりも見え初めにけれ

國といふ國の鑑となるばかり

みがけ丈夫やまとたましひ

辭

一夕、妖雲萬里、紫電霹靂。御惱二週日、蒼天色を變じて、九重震動。厚地影を潜めて、九泉嗚咽。日月黯憺、變を示し、風雨聲を呑み、極愁を送る。臣民驚駭、恐惶、天地に訴へ、神明に祈り、身を以て代はるを誓ふ。而も太神は、陛下を招き給ひ、陛下茲に神隠れ給ふ。

朝野内外、慟天哭地、涙已に竭き、繼ぐに血を以てす。
嗟哉、陛下は神也、越に修理固成の神功を了へ給ひ
つれば、安らかに、天翔けりて高天原に神去り給ひし
也、則ち神去り給ひしと雖、畏しや、御和靈魂と荒靈
魂とは、猶、人の世に留りて、永久に我等臣民を照鑑し
給ふ也。伏して惟みるに

明治天皇、寶算六十一、在位四十五年、天資神聖、允文允

武、乾旋坤轉、撥亂反正、日月運行、溫古知新、百搔維張り、
庶績咸熙、威武赫赫、八統に輝き、文德穆穆、十表を光
被し、内外沐浴、皇之則に遵ひ、皇之稜威を謳歌賛
美せざる者なし、堯舜影を滅し、輪王顔色なく、世界古
今の大帝、一も儔倫し得る者なし。神功丕烈、空前絶
後、眞に是れ世界開闢以來、不世出の大英主にして、人
類救世の大現津神矣。恭しく惟みるに、

四
陛下天津日嗣の高神座に登極以來、内外百般の經綸治績は、悉く敬神を以て始終一貫す。先づ五條誓文を天地神明に誓ひて、欽定憲法の素を示し、三條教憲亦敬神を以て第一とし、教育勅語の因を垂れ。登極當時の鎮魂祭、大嘗祭を始めとして在位四十五年間、賢所と伊勢大廟に對しまつる歳次月次の祭典神儀より、全國大中小の官幣社、國幣社等に至る迄歳

次必ず勅使奉幣使等を派遣して、嚴肅に祭儀を執り、行はしめ。更に社稷慶あり、國家事あれば、必ず神祖 天祖 皇祖 皇宗 歴皇と、天地神明、天津社、國津社に奉告し、常に以て神と念ひ、神と語り、神と行ひ、報本反始、同殿共床の神勅を體得祖述し給ひつゝありき。内は皇政維新、廢藩置縣、憲政、立法、行政、司法、教育、貨制、拓殖、農工商業、鐵路、電線等の制度文物、外は南

琉球を併せ、臺灣を開き、西、朝鮮を合せ、滿清を撫し、北、樺太を併せ、日清、日露の兩役、或は條約改正、日英同盟等の外交等、悉く以て、天祖皇祖の神猷宏謨を祖述し、惟神の天祐に歸結し給はざるはなし。而も勤儉上に持し、黽勉下に示し、日月と共に安處あらせ給ふことあることなし。恐多くも、日夕萬機の大忙裏、惟神花鳥に、皇祖皇社の宏謨を御製あらせ給ふこと、

十萬餘首の多きに達す。この一事、猶以て世界人類を驚絶し、鬼神を絶泣せしむるに足る。而して今や亦玉顔拜すべからず、天裂け、海涸れ、我等臣民の慟哭、それ將たいかにすべきぞ。噫、陛下は神也、我等赤子を愛し給ふこと、生死崩誕に依りて異なることあるなし、我等臣民は崩御と、御在世との別あるべからず。今日竊に

御靈柩を拜し、神靈を送り奉り、慟哭弭む能はずと雖神靈の永久に存在ましますを窺へば、感激亦已む能はず。矧してや。

皇太子 天津日嗣の皇統を繼承し、粵に踐祚し給ひ、天日依然赫灼とし、渾球を光被し、明治の皇猷は、大正に遷りて、愈振ひ、國家の前途は、益、瑞兆慶事に満ち、大日本皇國の大興隆、期して待つべき者あるに於てを

や。草莽之臣民稜威會同人は、八千萬の同胞と共に、感激已む能はず、分の存する所を忘れ、謹み畏みて、明治天皇の深き大御心を留めさせ給ひし、惟神大道の發揮を期し、窃に
大正天皇陛下の大御代に盡瘁奉公する所あるを誓ひ。茲に積年究明の一端を出版し、
靈柩奉送の紀念として、八千萬の同胞と、世界人類の

前に提出す。恐れ多くも是れ亦 惟神の攝理にして、神靈の照鑑あるにあらざれば、人力の及ぶ所にあらず、感激、嗚咽、云ふ所を知らず、恐惶謹云。

大正元年九月十三日

草莽之臣

稜威會幹事 佐原七郎拜書

引

一日、稜威會本部に参拜し、神前に於て、「禊と神化」の説を聞き、初めて、日本神道の、崇高幽玄にして、深遠宏大なることを知り、胸中の壯快、云ふべからず、殆ど闇中旭日を拜するの概あり。而して獨り之を私するに忍びず。自から筆記して、先生の許諾を得、茲に印刷して、廣く天下社會に公にす。

抑も日本人にして、日本固有の神道を解せざる者、殆ど十中八九、豈に慨嘆の至りに非ずや。今や露獨英佛等の諸國、國庫支出の下に、或は國庫補助の下に、公私の學會起りて、専門的に日本神道を研究しつゝあり。古事記の彼地に翻譯せられたる者、幾種類に及ばんとす。特に獨逸の如きは、窃に學者を派遣して、日本村落の神社を直接に研究せしめつゝありと聞く。而も日本民族にして、漫然風馬牛視するとは、豈に慚愧の至に非ず

や。此れ我が特に今日の舉ある所以也。

唯だ稜威會主張の神道は、日本最古の神道にして、一實神道、兩部神道、社家神道、乃至、吉田流、山崎流、本居、平田流の諸神道とは、その根本義を異にし、學究的にも、實踐的にも、殆ど其軌を別にす。故に彼等を聞きて、此を學ぶ時は、殆ど別天地に入るの感あると共に、いかに、日本最古の神道が、世界列國東西古今の宗教學說に超絶しつゝあるかを會得すべき也。

「日本最古の神道」は、禊と神化の説明にして、ほんの一短
篇たり、則ち短篇なりと雖、日本最古の神道を窺ふの一
端たるを失はず。同好の士、若し克く之に依りて日本
最古の神道を窺ふの一端緒となり、更に進んで全きを
究明するの大動機ともならば、七郎等の本懐、不過之候。

大正元年長月乃生日の足日、第一日

磐湖 佐原七郎謹誌

禊と神化日本最古の神道目次

第壹章	印度民族、猶太民族の原人觀……………	一
第貳章	日本民族の原人觀……………	四
第三章	神と禍津毘——惡魔……………	七
第四章	禊と神事……………	九
第五章	崇高絶對の信念——諸冊二尊の垂示……………	一〇
第六章	精神と物質——其實不二一體……………	一四
第七章	靈魂と原子、分子、原素……………	一六
第八章	一靈魂と八十萬の靈魂……………	一九

第九章	日本民族の人身觀	二二
第十章	主觀的祓	二五
第十一章	客觀的祓	二七
第十二章	禊—主客兩觀の禊	二八
第十三章	御幣と分靈	二九
第十四章	水と靈出と稜威	三一
第十五章	潮と天の眞井	三一
第十六章	客觀上の垢と穢—主觀上の靈と魂	三三
第十七章	振魂、伊吹と魂鎮	三七
第十八章	善惡と靈魂の統一不統一	三六

第十九章	思想言語の實體と靈魂	三九
第二十章	一魂分裂の活動	四一
第二十一章	二魂三魂乃至四魂等分裂の活動	四三
第二十二章	直靈統一の活動と魂分裂の活動との結果	四四
第二十三章	美人の色香と禍津毘——自己の缺陷	四五
第二十四章	八十萬魂個個の要求——全身の魔睡攪亂	四七
第二十五章	祓禊と神化の實行	四九
第二十六章	寒中祓禊の由來	七
第二十七章	奈良朝以前の禊祓秘傳	八一
第二十八章	世界古國の祓と禊	八三

神社崇拜目次

人類魂民族個人魂の異同	一九	進歩的思想の無形式	一三
主観上の靈魂と客観上の靈魂	一九	無形式の自殺論	一四〇
精神と物質との不二一體	一九	觀念理想と形式	一四二
日本民族の人身觀	一九	形式と神化	一四三
人類萬有と直靈和魂荒魂との關係	一九	生死共に不可能の斷末覺	一四六
主客位置を變ずれば同一靈魂	一九	基督教と大偶像	一五〇
顯幽富界の感應道交	一九	神と實在	一五一
顯幽感應の杜絶と國家の自滅	一九	神化して神を拜す	一五二
宇宙根本神と先人立勳者	一九	汎神論の愚と怪疑論の獨斷	一五三
天照大神と幣	一九	神に實あり體あり形あり	一五三
靖國神社と一の統一體的	一九	言語思想と形式	一五五
人類萬有、同性同體と基督教の偶像身	一九	哲學の三觀佛教の三觀と幼稚	一五七
偶像天	一九	神壇と宇宙縮刷圖	一六〇

大日本最古の神道

禊と神化

第一章 印度民族、猶太民族の原人觀

日本民族の原人觀は、印度民族の如く、天人の墮落にあらず、天人が地上に降り、食欲色欲等を生じ、その食欲色欲等の爲めに墮落して、人類と成

川面凡兒口述
佐原盤湖筆記

りたりと云ふが如き者にあらず。亦、その三毒五欲の煩惱身にして、容易に佛果菩提は得べからず、佛果菩提を得るには、自力としては、六波羅密を始め、あらゆる戒行を永劫兆載の間に自修専行するを要し、他力として、西方彌陀如來等の本願に順じて、攝取の利益を求めざるべからず。而も自力他力を問はず、悉く超世悲願の大聖釋迦牟尼佛あるに非ざれば、救済成佛の道なき者なりと云ふが如き者にもあらず。更に猶太民族の如く、原人墮落の結果にあらず、原人たる始祖が、惟神の命令に戻り、惡魔たる蛇の咒咀に迷ひ、生命の樹の果實を喰ふたるが爲めに、その兩眼開けて、善惡を知り、裸體を恥づるに至りたるを以て、惟神の赫怒を招き、責罰を蒙り、遠く神園の外に驅逐せられたるより、其の餘罪は遺

傳して、遂に吉凶禍福悲哀憂愁等に満ちたる人類とは、墮落したる者なりと云ふが如き者にあらず。亦、それ已に墮落の人罪あるの身となるが故に、世に救はるべきの道あることなし、故に惟神之を愍み、その獨り子なる基督を降だし、神と人との媒介者として、墮落の人を救へ、罪あるの身を救はしめたり。基督は惟神の命令の下に、聖靈として「マリヤ」の胎内に、その夫たる人の知らざる間に宿り來り、生長と共に、福音を傳へ、十字架の上に、血を流がし、人類墮落の罪を償ふたり。されば、人類は獨り基督の名を呼ぶに依りて、救はれ、神の下に到り、神婢神奴となり、永劫の樂を享くるなり。苟も基督に依らざれば、如何なる教にても、人類は救はれず、死後も永く地獄に落て、限りなき苦痛を受けんと云ふが如

ぎ者にもあらざる也。

第一章 日本民族の原人觀

日本民族の原人觀は、原人の始祖と云ふ者は、神として天降りたる者なり。その天降るや、天津神の此の世界邦土を修祖固成と云ふ勅命を受けて、顯はれ來りたる者なり。その始祖が神なるが故に、その子孫たる人類は、悉く亦神なり、八百萬神なり。獨り太古が神代たるのみならず、今日現在も亦神代なりけり、神代たらねばならぬなり。太古ばかりが神代として神々のましましたるのみならず、今日現在の人々も、亦神々としての神たるなり、神たらねばならぬなり、八百萬神たるなり。然り、

神として神代として、太古の神のそれの如く、寧ろそれにも優さる神として、神代として、この邦土を修理し、この世界を固成さねばならぬ者なり。それゆゑ、現在の天皇を稱しまつりて、現神と云ふ。獨り、天皇陛下の現神たるのみならず、現在の民人も、亦現神たるなり。さても、其後歴史家なる者出で、神武天皇以下を分割直線して、人皇の代と稱したる者は、是れ全く支那流の歴史に咎め倣ふたる謬見にて、日本民族の原人觀を忘却したるに原因する者とす。世界茫茫、その國を建つる者、尠からずと雖、多くはその始祖を以て、墮落の人と爲し、罪ある人となし。然らざれば、あらうことかは、大樹とし、水とし、火となし、或は惡魔となし、獸類となし、蟲類となし。人類は大樹より生れ出で、水より生れ出で、火

より生れ出で悪魔の喧嘩より生れ出で、猿類の如き者が進化したる等にて、そのいづれも子孫たる人類より眺めては、不快なる感想を發せしめざる者ならざるはなし。さればこそあれ。其子孫たる人類民族の身を處し、家に處し、國に處する上に於ても、君臣の義、父子の親、夫婦の愛、兄弟姉妹朋友等の信誼等はいかにも、放埒氣隨にして、常にその一方に偏執し、至き人倫を履行し得るもの、殆ど尠きを見る。是れ全く其始祖は神にして、其身も亦直に神なり、神たらねばならぬと云ふ觀念と、標準とが其腦裏に印象しあらざるに、職由せずんばあらず。始祖を以て、墮落の人と爲し、罪ある人となし、或は大樹となし、水火と爲し、惡魔と爲し、獸類蟲類等と爲すが如き觀念を以て、その子孫に印象せしむると、神なりとの觀念を印象せしむるとは、いづれか優劣ある。墮落の人の子孫は、益、墮落し、罪ある人の子孫は、益、罪あり。已に墮落し、已に罪ありとせば、その子孫たる者の苦痛は、それ將た如何ぞや。之を神の子孫は神なり、神としての身は清し、麗はし、あな、安すしと云ふ快樂あるに比較せよ、その優劣は、直に會得するに足るべき也。

第三章 神と禍津毘——惡魔

其始祖は神なり、始祖が神なるが故に、その子孫も神なり。只その神たるの行爲を逸埒すれば、禍津毘惡魔と爲る。その禍津毘となり、惡魔となるには、客觀上に於ける四圍の色聲香味剛軟等は、云ふ迄もなく、あら

ゆる權威名利等に接觸するより、その色聲香味權威名利等の微分子が、
禍津毘となりて、我の全身に犯かし來り、喰ひ込み來るなり。その犯か
し來り喰ひ込み來る毎に、我が全身は鼓動し始め見るもの嗅ぐもの聞
くもの味ふもの觸るゝもの感ずるものにつれ。あれやそれや、これや、
くれやと、四方八方に鼓動の脈絡は、漸々擴張すると共に、紛亂錯雜し。
中にも、その最も多く犯かし來り、喰ひ込み來る所に向て、氣走り、血走り、
全身を遂には、それに吸収せられ、不知不識の間に、色に耽けり、香に耽け
り、聲に耽けり、味に耽けり、權威名利等に耽けり、耽けると共に、許許多久
の罪と尤とを犯かしつゝ、其身も亦禍津毘惡魔の人たるに至るなり。

第四章 祓禊の神事

然れども、人は神の子孫なり、神たるが故に、その人の身を顯はし來れる
所の根本の靈あり、その靈を直靈と云ふ。この直靈は、神の分靈にして、
常に人々の全身主腦の中に秘鎮まりつゝある也。若し許許多久の罪
と尤とを犯かしつゝ、禍津毘となりたる人の胸中には、自然と警告の聲
を發し、神の綾威を仰がしめ、悔い改めしむると共に、その始祖に謝び、宇
宙萬有根本大本體の太神に謝び。客觀上なる四圍より浸かし來り、喰
ひ込み來る微分子の禍津毘を祓ひに拂ひ、主觀上に於ける許許多久の
罪と尤とを禊ぎ清むるなり。それ已に祓ひに拂ひ、禊ぎに滌ぎて清め

一〇
たるからには、亦元の神に復るなり、始めの如く神とはなるなり。罪と穢とのあればこそ、禍津毘(悪魔)とはなれ。本来神の子孫にして神たるが故に、その罪と穢とを祓ひ去り、禊ぎ除きて清めに淨むれば、亦元來の神に復り、始めの如く神たること、當然なりとす。白玉は泥土に感染するも、その泥土を除き去れば、亦元來の白玉たるを失はざると一般なり。是れ實に日本民族には、祓と禊との神事が存する所以ぞかし。

第五章 崇高絶對の信念——諾冊二尊の垂示

それで、日本民族には、釋尊の如き、基督の如き、一の救世主に遭はねば、人類は救はれぬと云ふが如き、小なる依頼心はあることなし。そはそも、

崇高深遠、宏遠幽玄、信仰の存すればなり。他なし、宇宙萬有、根本大極の大本體神なる天御中主太神は無始無終に、人類萬有を發顯し、照鑑し、攝理し、統一しましたしつゝあるなり。然り、人類萬有を發顯しますと共に、照鑑りつゝ、攝理つゝあるなり。吾等人類萬有は、照鑑守護つゝあるなり、攝理救濟つゝあるなり。已に照鑑守護つゝある身の更に照鑑守護給へと、哀求めるの必要なく、已に攝理救濟つゝある身を、更に攝理救濟照鑑守護給ひつゝあるなり、我よく哀求めずとも、大本體神は、夙に攝理救濟給ひつゝある也。吾等人類として、只その夙に照鑑守護給ひつゝある實狀を、一日も早く自覺して、其が限りなの恩恵を感謝し、且その

一二
夙に攝理救濟給ひつゝある眞態を、一日も早く自覺して、其が限りな
恩恵を感謝しまつるにあるのみ也。その夙に照鑑攝理給ひつゝある
の實狀眞態を知らざるか。又は忘るゝ時は、是れ我より自から大和體
神と遠ざかるが故に許許多久の穢を受け、罪を犯かし、禍津毘惡魔とは
變化するに至るなり。變化すればとて、悔ひ改め、その穢と罪とを穢ひ
禊ぎて、除き清むれば、亦元の神たることを得るなり。我より穢れたる
者なるが故に、我より清めざるべからず、然り我れ穢がれたる故に、我れ
之を清めるなり。我は夙に照鑑守護つゝある身の、その照鑑守護を忘
れたるが故に、悔ひ改めて、再び、その照鑑守護の中に復りたるなり。我
は夙に攝理救濟つゝある身の、その攝理救濟中を忘れたるが故に、悔ひ

改めて、再び攝理救濟中に還えりたる也。我は常に神と離るべからず
我と神とは、常に合一合體しつゝあらざるべからず、人類は何人にて、
この信仰信念なかるべからず、この信念信仰にしてあるからには、その
人は幸なり。世は特に釋尊の如く、基督の如く、一の救世主に依頼せざ
れば、救はれぬと云ふが如き、狹隘なる信念信仰あるを要せざるなり。
是れ實に我が始祖神たる諸冊二尊の日本民族と人類一般とに、宇宙大
本體神の勅令のまに、垂示せられたる大信念大實行に屬するもの
ぞかし。於是乎問題は進めり、穢と禊とに入る。禊と禊とは、大日本最
古の神道に入るの門也、第一鳥居也。大日本最古の神道を會得せんと
せば、先づ以てこの第一鳥居より窺はざるべからず。この第一鳥居に

一四
入れば、蓋しその一端を窺ひ得ると共に漸々進んでその全きを會得するの目標たるべき也。

第六章 精神と物質——其實不二一體

世界列國ではいづれも肉と心とを分ち、物質と精神とに別つ。(狭義に解すれば、肉と心。廣義に解すれば、物質と精神。それで、肉とは物質。心とは精神。只其解釋に廣狹あるのみにして、同一意味也。心と精神とを以て、無形の者と爲し、肉と物質とを以て、有形の者と爲すなり。獨り我が日本には、この區別あることなし。心——精神——とは、——肉——物質——の稀薄極小なる者にして、肉——物質——とは、——心——精神——の膨脹堅實

なる者に過ぎず。無形とか、有形とかは五官に上ると上らざるとの分水嶺、分界線たる名稱たるに止まる。本來、無形とか、有形とかの兩立して實在しつゝある者にあらず、不二一體の質なり體なりとす。形ありと思へる肉體も、熱となり、溫度となり、瓦斯態となり、無形となりつゝあり。形なしと思へる氣態も、氣流となり、氣象となり、雲となり、雨となり、水となり、有形とはなりつゝあり。電流は眼に見えぬからとて形なしと云ふべからず。眼に見えるからとて、肉體は永久に形の存する者にあらず。有形無形とは、五官を分域としたる名稱に過ぎず、本來、有形にも非ず、無形にも非ず、全然兩立して無形とか、有形とかの實在するにあらず、均しく之れ不二一體の質なりと知るべき也。然れば有形にも非

一六
す、無形にも非らざる者は何ぞ、五官を分域とすれば有形にも變じ、無形にも變ずる者は何ぞ。世界廣しと雖、いづれの國にも、その名稱あることなし、未だその實質實體を發見會得したる者なければ也。只、獨り日本には之れあり、之を稱して靈と云ひ、直靈と云ふ、是れ實に人類萬有の根本々體なりとす。

第七章 靈魂と原子分子原素

一の直靈は百千萬の直靈を吸收統一して、魂と爲る。魂の發達して、その輪廓を膨脹したる者が荒身魂と爲る。(世に云ふ心とか、精神とかは靈と魂とに當り。肉とか物質とかは荒身魂に當る也。)いづれも、性あ

り、質あり、體あり、同性同質同體也。直靈は純にして、極微稀薄也。魂は精にして、細小稀薄なり。荒身魂は粗にして、濃厚堅實なり。直靈は純一個體なれども、魂は一の直靈が他の直靈を吸收したる結晶體なると共に、荒身魂は更に魂と魂との集合體なりと知るべき也。例へば、母胎に宿りたる者は、第一の直靈にして、その第一の直靈は母胎内に宿ると共に、他の百千萬の直靈を吸集し、以て神経系の素質を造り、細胞の素質を造り、筋肉の素質を造り、骨絡の素質を造り、血脉皮毛等の素質を造り、五官等の素質を造りて、凝晶せしめ、その素質の凝晶體が聯絡統一して、發達膨脹しつゝ、人身とはなりたる者とす。猶、原子が集合して、分子を造り、分子が集合して、元素を造ると云ふ意味にも解し

得べし。然れども、人間より客観すれば原子分子元素なれども、原子分子元素それ自身が主観する時は靈也、魂也と云ふことを知り置かねばならず。人間のみ、主観客観あるに非ず。萬有悉く主観客観を有する者と知るべき也。日本民族の魂とは「マタシヒ」とも讀む「タマ」とは、淳なり、水の淳るが如き意味なり。「タマシヒ」の「ヒ」は靈の事にして「シ」とは助字なり。それで「タマシヒ」とは「淳りたる靈」と云ふことなり。されば靈の淳りて凝晶したる者が、魂也、魂也、魂の更に淳りて集合したる者が、荒身魂也、肉體也、物質也。然れども、他國の肉體物質と云ふ者は、心なく、精神なき者なれども、日本のは、肉體も、物質も、即、心也、精神也。いづれも均しく、靈也、魂也。他國の心と云ひ、精神と云ふ者は、實質實體なき者なれども。日本のは、實質實體ある者なり。

第八章 一靈魂と八十萬の靈魂

日本の靈魂とは、靈と魂との合體して一體と爲りたる者なり。日本では「ヒ」と「ミ」とは通音なる故に靈と魂との合體して一體と爲りたる者を稱して、靈魂とは云ふなり。さて、この靈は、人類萬有の根本體なるが故に、普通性也、平等體也。而して、その靈の淳り方は、それごとく同じからず、人類萬有、個々に之を異にす。故に魂は差別あり、個性也。猶同一水なれども、その淳り方の如何に依りて方圓長短厚薄等に、流を異にし、形を同ふせざると、一般也。抑も日本の「人身觀」は、他國のそれの如く、一個

の靈魂より成立したる者にあらずして、百千萬の靈魂より組織せられつゝある者とす。故に人身を稱して、八十萬魂命とは申すなり。或は略して、八千魂命とも云ふなりき。そは、第一の直靈が母胎に於て、十ヶ月内に、他の百千萬の直靈を吸収しつゝ、魂を造り、全身を集合組織す。この第一の直靈を靈魂と云ひ、百千萬の直靈を足魂と云ふ、百千萬の直靈は、百千萬の生魂である。百千萬の生魂が、足り満ちて居るから、足魂とは申す也。第一の直靈なる生魂が、全身百千萬の直靈なる足魂を吸収して組織したる者なるが故に、自から全身を統一主裁するの權威を有し居る者とす。それで、この第一の直靈なる生魂を稱して、玉留魂とも云ふ。玉とは魂なり、百千萬の足魂を吸収し、その吸収したる所の百

千萬の足魂の中に留り鎮坐して、主人魂と爲り居ると云ふ意味なのである。宇宙根本大本體神に屬して云ふ時は、生魂足魂玉留魂と稱へ、人類萬有に屬して云ふ時は、生魂足魂玉留魂と申すなり。

第九章 日本民族の人身觀

然れども、直靈としては、同一なり、第一の直靈も、他の百千萬の直靈も、本來懸隔あることなし。只當時の活動に勤怠あり、その勤怠の境遇につれて、第一の直靈に吸収せられ、第一の直靈に感化せられて、服従しつゝ、その一部分を組織し、眼とか舌とか耳とか鼻とか手とか足とか指とか齒とか筋肉とか骨格とか細胞とか、神経系とかの一部分的活動を爲し

つゝ、第一の直靈の爲に貢献し、その半面には、亦自からも、第一の直靈に統一せられて、自活しつゝある者とす。それゆゑ、常に第一直靈の統一を破りて、分々個々に、各自それ〴〵、自我を膨脹せしめんとしつゝあるなり。獨り第一直靈の統一を破らんとするのみならず、更に進んで人身の全體を自己に統一し、自己が主人魂たらんとしつゝあるなり。然り、第一直靈の統一を破ると共に、一方に分裂割據し、漸々次第に、他の百千萬の八十萬の魂を制服し、それをして、悉く自己の慾望する所に向て活動せしめ、卒には全身を統一主宰し、悉く以て他の百千萬魂の活動を自己に貢献せしめんとしつゝある者とす。例へば、一家の主人は第一直靈なる生魂にして、妻子眷屬は、百千萬の直靈なり、生魂なり、足魂なり

人間としては同一なれども、當時の境遇につれて、吸収せられ、感化せられ有が故に服従して、妻たり子たり、奴婢等として、一部分の活動を爲し、主人の爲に貢献しつゝ、その半面には、亦自からに自活しつゝあるなり。然れども、間がな、隙がな、主人の統一力を破りて、妻も子も、奴も婢も各自それ〴〵に自我を膨脹せしめんとはしつゝあるなり。主人にして、少しく統一力を怠る時は、妻なり子なり、番頭なり、家令なり、家扶なり、奴婢なり、直にその虚隙に乗じて、漸々自我を増長し、他の眷族を感化し、制服し、壓迫しつゝも、自己の一味黨與となし、陰然一家を主宰して、主人公をば、一室に幽閉するにも至る。而して「お家騒動なる者起り、其家は卒に衰替し、或は滅亡するの不幸あるに至る也。故に一家の主人は、常

一家の平和を主とし、妻子眷族各自の自我を調和しつゝ、全體を統一主宰することを怠るべからず。斷じて、一人の自我のみを増長せしむべからず。一人に偏して、自我のみを増長せしむる時は、是れ主人の統一力を破らるゝの發端にして、自家騷動の禍根たることを忘るべからざる也。人間一身の統一も亦それ然りと爲す。第一直靈が統一を怠る時は、全身百千萬の足魂は、分裂割據して、個々分々の自我を、個々分分に膨脹せんことを企て、その一舉一動に統一なく、我が身ながらも、身の處置に苦しむに至るなり。此の如くんば、獨りその人格の完全ならざるのみならず、亦見るべきの事業をも成立すること能はず、況してや千古を感動せしむる大事業に至りては、その人の夢想だに及ばざる所に屬す。日本民族の靈魂觀「人身觀」とは、實に此の如き者にして、實に世界列國と異なる所あることを會得すべき也。是れ實に日本民族に祓と禊との神事ありて、直に第一直靈の開發を期し、全身足魂の調和と統一とを訓練する所以なりとす。

第十章 主觀的稜

祓とは「主觀的自律の我より云へば、ハルヒ也。」ラは「ル」に轉ず、同一「ラ」行也。「ハルヒ」とは、張靈にして、全身百千萬魂を吸收したる根本靈の直靈を張り膨脹して、その稜威、その力を百千萬魂に滿ち足らはし、全身に充ち足らすとの意味なりとす。例へば、春と云ふ意味に同じ。春とは

張るなり、芽が張り、葉が張り、枝が張り、幹が張り、蕾が張り、花が張り、總て張るなり、膨脹して生長するより、春とは稱するものぞかし。根本靈たる直靈が膨脹れて、その稜威、その力を、全身百千魂に充ち足らせば、全身百千萬魂に、外界より侵し來り、喰ひ込み來り居る所の垢と穢とは、漸々次第に遁げ去り、滅し去るに至るを以て、根本靈なる直靈の膨脹るれば、その稜威、その力の全身に充ち満つる故に、全身の垢と穢とを拂ひ、罪と尤とを拂ひ去るに至るなり。それで、祓とは亦、拂ふと云ふ意味に歸す。是を以て、祓とは裏より云へば、張るにて、表より云へば、拂ふとなり。直靈を張りて、垢と穢と罪と尤とを拂ふなり。

第十一章 客觀的祓

客觀的律——神より云へば——宇宙萬有の根本大本體神の靈なる直靈が、常に宇宙萬有に張り充ちて足らばしつゝあるが故に、人類萬有の垢と穢とを拂ひ除き給ひつゝある也。人類自からが、その第一直靈を張りつゝあるのも、その實は、我のみの力に非ず、全く大本體神の大直靈の張り満ちつゝあるのにつれて、我の直靈が鼓動せられつゝ、膨脹るゝのである。例へば、草木の自から張りて、蕾と開き、花と開き、葉と張るが如きも、其實は大陽の光を受け、煖氣に鼓動せられて、張りつゝ開きつゝあるのと一般也。それで、我の自から膨脹れて、垢と穢と罪と尤とを拂

二八
ひ除きつゝあるが如きも、其實は神より張らせ神より拂はせ、神より
除かせつゝあるのである。

第十二章 禊——主客兩觀の禊

禊とは「ミ」は靈也「ヒ」は「ミ」に通ふ。「ソギ」は滌ぎ也、滌ぐ也、又は削ぎ也。
それで、主觀的自律より云へば「我」より云へば「宇宙根本太體神の靈
を」我の靈に滌ぎ入るゝ也。我の直靈に「神の大直靈を滌ぎ込むな
り、滌ぎ入れ、滌ぎ込みて、全身百千萬魂にかゝりある所の許々多許の垢
と穢とを削ぎ去り、削ぎ落す也。客觀的自律より云へば「神より云へ
ば」神の靈を「我が靈に滌ぎ入れ給ひ。我が靈に「神の靈を滌ぎ込
ませ給ひ。我の全身百千萬魂に集りかゝりある所の許々多久の垢と
穢とを削ぎ落し削ぎ去り給ふなり。

第十三章 御幣と分靈

禊には、御幣を用ひ。禊には、海川に投ず。御幣とは、漢音にして俗語た
り。日本語にては、御幣と讀む也。「ヌサ」とは「ヌ」は「アマノミナカ」ヌシ
ノミコトの「ヌ」にして、靈と云ふ意味なり。「サ」とは、五月雨、小波等の「サ」に
して、日本語では、細小くなることを「サ」とは申す也。根本大本體神より
分泌分派する分靈を「サ」とは、申す也。それで「ヌサ」とは「神の大靈の分
泌分派する分靈を意味したる者」とこそ知るべかりけれ。宇宙根本大

本體神の大直靈は、常にもがもに、間斷なく分泌分派しつゝ、その分靈の人類萬有に天降り天かゝりつゝあれども、全身百千萬魂に許許多許の垢と穢とを受け、直靈の幽閉て開らけ居らざるが爲に、肉眼にては、見たて奉ることを得ざるに過ぎず。故に神慮かしく、人間に「御幣」を示し、御幣の三房六房乃至八垂のその如く、神の大垣靈は、分泌分派しつゝ、その分靈の天降り天かゝりつゝあるものぞと、教へ給ひつるものぞかし。それで、祓とは「表」は「御幣」にして、風にして、裏は「神」の分靈とこそ知りねかし、表の御幣と風とに通して、神の分靈は常に人類萬有に天かゝりありとは心得べき者なり。

第十四章 水と靈出と稜威

さて、その荒海荒川に投ずるのは、御幣にて、垢と穢とを拂ひ除くと共に、荒海荒川に投じて更にその垢と穢とを滌ぎ去り、洗ひ去るなり。表は水なり潮なれども、裏は神の分靈也。稜威也。稜威とは「靈出也、神の大直靈の分泌分派する分靈は、三稜形を爲しつゝ、光あるが故に、人間より之を客觀しまつりて、稜威とは云ふなり、分靈の分泌分派する所を客觀しまつれば、三稜角にして、その光と形との威嚴あること、えも云ふべからざれば也。水の蒸發飛散する所は、幾分かそれに似たりき。故に「ミヅ」とは「靈出世、靈出也。猶、太陽の光熱は、神の大直靈の靈と均しき

が故に、日と云ひ、火と云ひ、光りとも云ふに同じき意味と知りぬべし。

三二

第十五章 潮と天の眞井

且つ夫れ水も火となり、火も水となり。火の燃るを燄と云ふ、潮は水の燃つゝあるものなるが故に、水よりも熅煖なり。潮の「シ」は助字にして「ホ」なり、燄也、水の燃えつゝあるを意味す。それで、楔とは表は水にして、潮にして裏は靈也、燄也。水と潮とに通じて、天の眞井の靈出を受くる也。宇宙根本大本體神の稜威の赫灼たる炎靈を蒙るのを意味する者とは、心得べき也。天の眞井とは、天上の井と云ふにあらず、この世の水は井戸に湧き出るを以て、近く比喩を采り、神の靈の出るを稱へて、天の眞井とは呼び做したる者ぞかし。

第十六章 客觀上の垢と穢、主觀上の

靈と魂

人身は總て靈靈の集合體なるが如く、魂魂の集合體なるが如く、宇宙も亦靈靈の集合體なり、魂魂の集合體なり。人間より客觀する時は、原子、分子、原子、原素なれども、その原素、分子、原子、原原子が、それ自身に主觀する時は、即是靈靈也、魂魂也。客觀すれば、人身も原素、分子、原子、原原子の集合體なれども、主觀する時は、靈靈の集合體なるを自覺するに徴して、萬有各自は、悉く各自の主觀を有しつゝある者と知るべき也。その

三三

三四
外界よりふりかゝり來り、侵し喰ひ込み來る所の垢と穢とは、人間より客觀したる名稱に過ぎず。其垢と穢とが、それ自身に主觀する時は、我と均しく靈也、魂也とす。唯だ、其形に厚薄大小の差あるに過ぎず。罪と云ひ、尤と云ふのは、主觀的の行爲を抽象したる虛名、虛體にあらざして、悉く之れ靈也、魂也、實體、實質あるものとす。日本民族の人生觀、宇宙觀には、無形と云ふ者、虛體と云ふ者、斷じてあることなし。悉く是れ實質、實體、實名なり。本來、形なく、質なく、體なき者には、名も起るべき者にあらざる也。故に日本民族の犯罪觀なる者は、主觀にも、客觀にも、悉く實質、實體のあるものにして、その思想と云ひ、行爲と云ひ、悉く微分子の鼓動である、靈靈の主觀的内容に鼓動する範圍を抽象して、

三五
思想と云ひ、客觀的外界に變動する範圍を抽象して、行爲とは、名くるに過ぎざる者とす。而して、日本民族の犯罪なる者は、我より進んで罪を犯かし、尤を造るものにあらず。そは我は、是れ神なり、神の分靈、分魂、分身、分體なればなり。その尤を造り、罪を犯すは、必ずや、外よりの刺戟に誘惑、煽動せらるゝに原因するなり。然り、外界の垢と穢とに觸れ、罹かり、外界の禍津、毘が、我の四圍に襲ひ來り、喰ひ込み來るが故に、我が眼が、その禍津、毘に誘はれて、穢がれ、我が耳が、その禍津、毘に誘はれて、垢じみ。吾が鼻、吾が舌、吾が身、吾が手足等が、その禍津、毘に誘はれて、穢がれ、垢じむから。その最も多く、穢がれ、垢染みたる眼の魂なり、舌の魂なるが、茲に煽動し始めて、他の百千萬魂を鼓舞、煽動しつゝ、その同意を得つゝ、全

身主裁の直靈を幽閉すると同時に、その觸れ來り襲ひ來り喰ひ込み來りつゝある所の出源地に向て、全身は漸々次第と走り行きつゝ、その欲する所のまゝに、之を得んとする事もあるべく罵る事もあるべく、殺す事もあるべきなり。之に反して、その善事に於けるも、亦然り、只その觸れ來り喰ひ込み來る者が垢と穢とにあらず禍津毘にあらずして、清き香、淨き氣、清き神、直靈たるの差ありて、その目的の善言善行たるに至るものとす。故に日本民族は祓と禊とを以てこの外界に觸れかゝる所の垢と穢とを拂ひ、外界より侵し來り襲ひ來り、喰ひ込み來る所のあらゆる禍津毘を滌ぎ除く所以なりとす。滌ぎ除きて、人身構成の根本直靈の幽閉せらるゝを防ぐと共に、常に其の直靈の開發しつゝ、百千萬魂の分裂割據するのを制御して、全身の統一を期し、人生宇宙に神たるの大成格を發揮せんとする所以なりとす。

第十七章 振魂伊吹と鎮魂

さて、その祓と禊とを爲すには、振魂と雄健雄詰と伊吹と鎮魂との事を説明せざれば、未だその全き者にあらねども、餘白なければ、茲には、大略を概説す。振魂とは、全身を振ひ動かす事なり。雄健とは、姿勢を正整し、姿勢を構へて、巖の如くするなり。雄詰とは、大聲を連發する義なり。伊吹とは、呼吸する事なり。鎮魂とは、全身の八十萬の魂を鎮定して、直靈を開發し、その直靈の伊吹たる稜威を、全身八十萬の魂

魂に注入充足するのを申すなり。勿論、それには、それと相傳の形式あり、意味ありと知るべし。

三八

第十八章 善惡と靈魂の統一不統一

さて人類は如何なる人にも、自から進んで罪を犯かし、惡事を爲すと云ふことなし。必ずや、外界の事物に刺撃せられ、その刺撃に依りて全身の八十萬魂が鼓動し始め、その鼓動が、漸々その目標たる事物に向て集中直入するから、茲に初めて、全身がその目標に對して活動を爲すに至るものなり。獨り惡事に拘はらず、善事に向ても亦、それなのである。只その直靈が全身八十萬の足魂を主宰統一して活動する者、善事となり。之反、八十萬の足魂中の一魂が分裂して活動し、或は其一魂が二魂三魂等を糾合して、別運動を爲し、或は、一魂が主動して、八十萬の足魂を強制強脅して活動するが如き時、惡事とはなるのである。

第十九章 思想言語の實體と靈魂

人類の欲と云ふ事も、思想と云ふ事も、外界の刺撃がないならば、單に主觀上のみにては發する者でない、食ひたい、飲みたいと云ふ事も、外界に食ふべきもの、飲むべきものが、實在しつる事を認め居るからである。赤子が呱呱の聲を發し、或は飢渴を訴ふるのも、胎内に於て夙に飲みつ

三九

つ食ひつゝありたるからである。その長じて發する所の思想は、全く
外界事物の刺撃を追ひつゝ起り來るのに過ぎない。月花を眺むれば、
月花の概念念想發し、女性を見れば、女性の概念念想發し、音曲を聞け
ば、音曲の概念念想發し、魚鳥を食へば、魚鳥の概念念想發し、山に對すれ
ば、山水に對すれば、水、天地萬有に對すれば、天地萬有の概念念想發す。
更にその一念一想を綜合統一して、觀念と爲り、思想となり、理想となる
のに過ぎない。處が、今日までの學理説明では、東西古今共に、思想や、理
想を無形のものとして解釋しあり。獨り日本のは、思想も亦有形である。
質あり體あるものである。言語音聲は微細極小なる原子の震動で
あるが如く、思想は「潜んだる言語である。潜んだる音聲である。我と吾

が身に、竊に胸裡に物語りつゝある言語音聲が思想である。竊に胸裏
に獨言獨語せざれば、音聲もなく、思想もない。それ故に悉く皆微細極
小なる質あり體あり形ある原子也、分子也。その原子分子とは、日本
神代に謂ふ所の靈である、魂である也。人間より客觀すれば、原子なり、
分子なり。原子分子それ自身に主觀する時は、靈也、魂也と知るべき也。

第二十章 一魂分裂の活動

それで人間が月花を眺むる時は、月花の光と色香とが、その人の眼魂に
注入し來る。女性を見れば、女性の光澤と色香とが、其の人の眼魂に注
入し來る。鼓太鼓、琴、三味線、笛、喇叭、ヲルガン等の樂曲を聞けば、それぞ

れの音聲が、その人の耳魂に注入し来る。光とか、色香とか、音聲とかは極小微細なる氣態なり、分子なり、原子なり、電子なり、悉く之れ質あり、體あり、形あるなり。その光とか、光澤とか、色香とか、音聲とか、氣態とか、分子原子電子とかは、人間より客觀したる名稱に過ぎず。光——光澤——色香——音聲——氣態——分子——原子——電子——それ自身に主觀する時は、均しく之れ靈也、魂也と、こそ知るべけれ。されば、女性の色香たる靈や魂が、眺むる人の眼魂に注入し来る時は、その眼魂は、その刺戟を受け、茲に鼓動し始め、全身の八十萬の足魂を誘動し、目標たる女性に向て活動せんことを迫るの主動者たるに至る、是れ一魂分裂の活動也。

第二十一章 二魂三魂乃至四魂等分裂の

活動

或は、女性の通行を見ると同時に、飲食店の酒肴の香を嗅ぐことあり。然る時に其人の鼻魂は主動して、全身の足魂を誘動し、飲食店に上らんことを迫る。舌觀は直に之に應じて鼓動し、飲食店に上ることに同意するのみならず、寧ろ鼻魂に代りて、大主動者となり、全身の八千魂を誘動す。眼魂は女性に向つて走らんとし、鼻魂と舌魂とは飲食店に上らんとす。是れ二魂分裂の活動也。或は、筋肉魂、骨魂等は、女性にも走らず、飲食店にて上らず、早く家に歸りて、横臥し、其日の疲勞を慰藉せんと

を欲することあり。一人にして同時に三様四様の活動を爲す。是れ三魂四魂分裂の活動也。

四四

第二十二章 直靈統一の活動と分裂の活

動との結果

抑も人身は本來一致の活動を爲すべきもの、全身一軌一律に一致して活動する時は、その行爲は悉く善事たり、是れ直靈統一主宰の活動なるを以て、自己を傷け、他を害するの行爲なければ也。而もその一魂分裂の活動、二魂三魂乃至四魂等の分裂する活動は、悉く是れ悪事たり。その全身調和の統一を缺くを以て、自己を傷け、他を害するの行爲たるに至れば也。

第二十三章 美人の色香と禍津毘——自己

の缺陷

今夫れ女性の色香其的は、悪なるに非ず、飲食店の臭味其的は悪なるに非ず。女性はその人の眺めつゝあるを知らずして通行することあり、飲食店も、其人のみを目標として營みつゝあるに非ず。世間は美なる女性に邂逅するも、知らざる人あり、對岸火視する人あり、飲食店の前を通行するも、知らざる人あり、馬耳東風視する人もあり、是れ其人々は別に主動する所ありて、一魂も之が爲に鼓動し始むるに至らざる者とす。

四五

その女性の色香に、眼魂の鼓動し始め、飲食店の臭味に、鼻魂舌魂の鼓動し始むるものは、その直霊の主動なくして、全身八十萬の足魂を統一主宰するの活動を失ひつゝあるに原因する者とす。されば女性の色香其的は悪なるにあらず、女性全身自然の分子原子の發動なり、女性分身自然の靈靈の發動なり。飲食店の臭味其的は悪なるにあらず、飲食店自然の分子原子の發動なり、靈靈の發動なり。只その人の全身に統一力を缺きつゝあるが故に、缺陷あるが故に女性より發散する所の色香たる分子原子がその人に注入し來り、女性より發散する所の色香たる靈靈がその人に刺撃し來り、茲に禍津昆とはなるに至るなり。垢となり、黴菌たるに至るなり。而も私の直霊主動して、常に全身八十萬の足魂を主宰統一しつゝある時は、いかに侵し來る所の垢あり、黴菌あり、禍津昆ありとも、私の全身より發散する所の息氣溫度は、彈撥して受けず、一魂若しくは、二魂三魂の分裂して走り出ることなき也。

第二十四章 八十萬魂個々の要求——全身

の魔睡攪亂

然れども八十萬の足魂は、各自分々に常に、その欲する所を要求しつゝあるなり。苟も外界より觸れ來り、注入し來り、刺戟し來る時は、八十萬の足魂は、直に分々個々に、その欲する所の注入刺戟につれて、各自分々個々に鼓動し始め、他の諸魂を誘導すると共に、直霊の主宰統一を破ら

んとしつゝある也。それで多くの人々は殆ど外界あらゆる色—聲—
 香—味—輒剛—は云ふまでもなく名譽權威財寶等より發散する所の
 垢に觸れ、微菌に犯され禍津毘に襲はれつゝその注入刺戟の爲めに全
 身八十萬の足魂は四分五裂支離滅裂しつゝあるなり。然り外界より注
 入刺戟し來る所の禍津毘に魔睡せられ攪亂せられ殆ど自己と云ふこ
 とを忘却しつゝあるなり。只その一魂のみの要求を満足せしめんが爲
 に全身を忘却し、全身を犠牲とし、盡日晝夜苦役し、世を終るまで覺らざ
 る者尠しとせず。豈に惑むべきの限りにあらずや。是れ祓と禊との
 必要なる所以とす。祓ひ禊ぎて、直靈を開發し、全身を統一し、全
 性格を發揮せざるべからざる也。

第二十五章 祓禊と神化の實行

そこで、日本民族の禊祓とは、全身を統一して、神化するにあり、神化して
 本來本有の神たることを實顯するにあり、宇宙根本大本體神の分靈分
 魂分身たる神體を實顯發揮するに在る也。▲さて、その全身を統一す
 るには、先づ自己の根本本體靈の直靈（第一生魂）が自覺して、神直靈
 たるにあり、直靈が我と吾身に、神たることを自覺したる時は、即ち神直
 靈神と成りたる時なり。▲已に根本本體靈の直靈は、自覺して、神直靈
 神とは爲りしと雖、未だ以て全身の八千魂（足魂）が、同化せず、同化し
 て神たること能はず。▲その同化せざる者は、同化して神たること能

はざる者は、外より許許多久の汚と穢との禍津毘(人間より客観すれば、汚と穢なれども汚と穢とが主観すれば靈也、魂也。犯さるゝ人の爲には禍也禍津毘也)。に犯され喰込れて、その禍津毘の來れる所の先方に向つて、足魂たる八十八千萬の魂が、それ〴〵好む所に從ふて、馳せ行き驅け廻はりて、罪と尤とを造りに作りつゝあればなり。▲故に先づ祓の祭を爲し、御幣を振り、御幣に通じて、宇宙根本大本體神の分體たる大祓戸神の靈を受けて、稜威を受けて、我が根本靈たる直靈を張り、直靈の息氣なる稜威を、全身の八十八千萬魂に、張り送り、張り充たし、張り足らはし、その八千魂に觸り犯かしある所の許許多久の汚と穢とを拂ひ去り、拂ひ除く也。▲更に河に投じ、海に入り、水と潮とに通じ、宇宙根本

大本體神の靈を受け、大稜威を受け、吾が根本靈の直靈に注ぎ清めて、全身八千魂の禍津毘を削ぎ落し削ぎ去り、その八千魂を洗濯清光むる也。是れ祓の祭の後に禊の行事ある所以なりとす。▲然れども神の靈を受け、吾が靈の直靈を張ることは、尋常一様の事にては張ること能はず。ましてや、八千魂の汚と穢とを拂ひ、禍津毘を除く事は、尋常一様の事にては六ヶ敷また汚も穢も、禍津毘も、尋常一様の事にては、逃げ行かぬなり。於此乎裏伊吹を爲す。▲裏伊吹とは裏伊吹を包有し省略して申し來れる名稱たり、裏とは腹の内――全細胞内――にて呼吸するが故に裏と云ふ也。是れ我身を祓て後には冥目し、鼻より神の靈なる神直靈を伊吸ひ込み、之を全身に伊吸ひ込み、全身の八千魂に伊吸ひ込み、外には

出さぬ也。口より出ださぬ也。唯だ腹の内にて、否、全身の細胞内にて伊吹く也。直靈が伊吹きて、八千魂に送り、八千魂が伊吹きて、直靈に送り、直靈が伊吹て、八千魂に、八千魂が伊吹きて、直靈に。此の如く、相互に伊吹きつゝ、伊吹かれつゝ、ある時は直靈と八千魂とが、神の靈に、神直靈に、醗酵醞釀せられつゝ、相互に同化合體するに至るなり。然れども、相互の醗酵醞釀が、それにては、未だ足らぬ也。於是乎、振魂を爲す。▲振魂とは、神代以來傳へ來たる一定の形式に依り、全身を振り動かすを云ふ。今、外界の空氣に通じて、神の靈を、神直靈を鼻より伊吹ひ込み、冥目して、口を閉ぢ、腹の内にて、否、全身の細胞内にて、直靈と八千魂とが、伊吹きつゝ、伊吹かれつゝ、ある間に於て、更に一定の形式を以て

全身を振動す、大地も割れ、蒼天も裂けるまでに、振り動かすなり。振り動かしたつゝ、直靈と八千魂とが、相互に裏伊吹裏伊吸を爲すこと、二分三分四分五分六分、乃至十分二十分間も繼續し、而して後に口を開て、腹内細胞内に在る限りの息氣を、靜かに長く吹き出すなり。之を裏伊吹振魂の一行事を爲す。▲吹き出しては、更に冥目して、鼻より入れて、口を閉ぢ、腹内細胞内にて、此の如くに直靈と八千魂とが、裏伊吹を爲すと共に、此の如くに振動して、振魂を爲すこと、猛烈なり。▲三分五分毎に、乃至十分二十分毎に、繰り返し、繰り返し、十回二十回の行事を爲す。▲勿論、初身の人又は其人の強弱の度に應じて、自から緩急の度あり、別ありとす。要するに、緩より進んで、漸々次第に急なるに至る者とす。▲そ

の行事毎に、猛烈に熱烈になり行くを以て、渾身烈火の如く、汗は全身に流れ出で、亦、那的も我を襲ひ、吾に迫り來ること能はず。直靈は自然と八千魂を統一同化し、八千魂は亦他に走りて分裂するの餘地なく、自然と直靈に統一同化せられ。且つ夫れ八千魂個々の直靈も自から開けて、全身の根本直靈、中身直靈に結晶同化するを以て、無上の樂と爲すに至る也。▲是れ蓋し直靈が自覺して、神直靈神と爲り、神の靈を受け、神直靈を受け、先づ直靈自からに伊吸る込みて之を八千魂に吹き送り、送られたる八千魂は、之を伊吹るつゝ、直靈に吹き返しつゝある間に、八千魂の個々の直靈が開け來りて、之を伊吸る込みつゝ、吹き返しては、伊吸るつゝ、個々の直靈が、個々の八千魂を統一靈化する。靈化して、全身の中

身直靈、根本直靈と、醱酵醞釀して、その根本中身直靈、根本直靈に統一結晶せられつゝ、同化するに至れば也。而して後初めて、全身が統一靈化したる靈體となる。之を稱して、大直靈神とは申す也。▲いかに、直靈が自覺して、神化し、神直靈と爲り、神直靈神たり、たらんとするも八千魂が個々分々に、汚と穢とに觸れ懼り、禍津毘に犯かされつゝ、四方八方に分裂出入しつゝありては、名將が紀津なき亂兵中に直立したると同般如何ともすべからず。故に一定の紀律の下に號令訓練する時は、漸々次第と亂兵を統一して、十萬百萬の兵と雖、同身一體の常勝軍たらしむることを得る也。而も、名將たるにあらずんば能はず。直靈が自覺して、神直靈神の大名將と爲り、初めて、全身八千魂の統一靈化し、一身同體

の常勝軍たる大直靈神とこそ爲り得る者とす。▲爲に日本民族の人身觀は全身靈也、魂也、百千萬億自我の集合體なり、統一體なり、唯だ、直靈と云ふ中身我根本我と、八千靈、八千魂と云ふ群我分派我あるものとす。大直靈神と爲り得たる時は、直靈と八千魂との統一同化したる時なるを以て之を稱し、鎮魂とは云ふ也。鎮魂——とはたましづめと讀み。又「たましづめ」とも讀むあり。たましづめとは、直靈が八千魂を統一鎮定したる意味にして、たましづめとは、八千魂が鎮靈を中身點として自から結晶鎮定したるを意味したる者とす。▲然れども、日本民族の鎮魂と云ふ事を以て、支那流の靜坐、印度流の禪定と同一なりと誤解する勿れ。支那の靜坐、印度の禪定なり、無我也、我れ吾を忘るゝにあり

寧ろ我を無くして、宇宙の大我神我に化するにあり。故に人身を陰陽五行として、地水火風空として、之を解除解脱するにある也。ましてやその大我神我なる者は、大極とか、理とか、氣とか、眞如とか、法性とか、にて未だ宇宙絶對の根本大本體とはするに足らず、ほんの一角一部を解釋し得たるに過ぎず。▲日本民族の鎮魂とは——動的也、動靜一體也。有我なり、有我の結晶體なり。我を忘れず、我を無くすることもなく、直靈の根本我に、八千魂の分派我を統一結晶すること、獨樂子の如し、獨樂子の大活動大廻轉するや、殆ど大沈靜、大鎮定しつゝあるが如く、宛然動靜一體たり。是れその中身點中心棒あるが故に、獨樂子の全部がこの中身點中心棒に集注結晶して、この動靜一體を發顯しつゝあるものと

す。恰もそれ地球は大廻轉しつゝあるが故に、大鎮定しつゝあると一般也。獨樂子の大廻轉して、動靜一體を發顯しつゝある時は、箸や筆等を投ずるも、彈撥して、之を擊退し、之を受けず。日本民族の鎮魂とは、之を物に比喻して、その一端を顯はせば、正敷、獨樂子の如く、それなりき。直靈の根本我に、八千魂の分派我を統一結晶して、動靜一體の大活動を發顯しつゝある者とす。▲自我を忘れ自我を滅し、無我たらんとせば始よりして、我なきに如かず。始よりして我なき者とせば、我の顯はれ來るべき者ならず。靜坐や、禪定や、我を忘れ、我を無くせんとするも、我は決して滅し得べき者ならず、我を忘るれば、我を忘るの我ありて存し、我を無くすれば、我を無くしたる我ありて存す。我は本來滅し得べき者

ならず。故に彼等は忘我無我にては安んずること能はず、我たる小我を忘れて、天地一體の大我たらんとし、我たる小我を無くして、眞如平等の大我たらんことを期す。是れ小我を忘れたるに非ず、自滅したるに非ず、天地一體の大我に結晶したるに過ぎず。本來結晶しつゝあることを初めて自覺したるに過ぎず。我としての自覺したるに過ぎず。我としての小我は、依然靜坐しつゝある也。小我を無くしたるに非ず、眞如平等の大我に結晶したるに過ぎず。本來結晶しつゝあることを初めて自覺したるに過ぎず。我としての小我は、依然禪定しつゝある也。無は有を生せず、有は無とならず、我體は本來不生不滅にして、小我も亦た大我と共に實體實我なり。然るに、忘るべからざるの小我を忘れ、無くす可

六〇
らざるの小我を無くせんとす。是れその大我を誤解して眞如と爲し阿頼耶と爲し、法性となし、大極陰陽と爲し、理と爲し、氣と爲し、天と爲し、宇宙根本大本體として、は、只其一角一方面を窺ひ得たるに過ぎざる者となる所以なり。奚ぞ矧んや、小我を忘れ、小我を無くするは、自我の活動を中止廢滅せんとする者にして、その人生を解體し、家庭國家を解體し、徒に空想妄念に馳せ、現實と迂遠なる境に迷惑流轉し、却て天地の心を得たり、如來性を體得したりと云ふ愚に陥る者とす。已に自我を解體し、自我の活動を中止廢滅する者、いかにぞ、人生社會を経綸する大活動を期し得べけんや。もしか經綸せしむることありとせば、その結果は亡國滅家たらずんば幸也。印度の古今を見よ、支那の古今を見よ、歴

史は歴々之を證明印判す。支那が印度たらざりしものは、儒教存したれば也。日本の佛教盛なりしは、神代思想ありて、之を同化結晶したれば也。▲それ已に、日本民族の鎮魂は、忘我無我到非ずして、認我也、有我也、解體退靜に非ずして、結晶進動也、動靜一體の大活動也。根本自我の直靈に分派自我の八千魂統一結晶し得て、大直靈神となり、大直靈神としての鎮魂が終はれば、更に雄健となる。▲雄健とは、神代以來の相傳たる一定の形式を以て、姿勢を正整し、常立神となるなり。常立とは、動かざることを巖の如き神體を發顯するを云ふ。雄健終ると共に、雄詰と爲る。▲雄詰とは、神代以來の相傳たる大發聲なり。イーエツエーイッの大音を發するを云ふ。此音は、劍道柔道居合等に傳はり居

れども、彼等は其の由て來る所も知らねば、亦その韻學上の起因も効果も知らず。是れ神代以來、正統なる歴史相傳ある者と知るべし、禊修行の人に限り、特に之を授くる者とす。抑もその起因由來を知らざる人なりとも、イーエツ。エーイッ。と三たび大發聲して試みるべし、いかに全身に壯快を覺ゆるぞや。劍柔でも相撲でも、戦争でも、事業でも何事につれ、此の聲を發せざれば、元氣鬱勃たることを得る者にあらず。いかに此の聲の神の聲にして、尊重すべき聲たるかを自覺すべき也。雄詰て後には表伊吹を爲す。▲表伊吹とは、口を閉ぢて、鼻より空氣に通じて、宇宙根本大本體神の稜威を伊吸込み、腹内より全身の細胞内に吸込みて、充滿充足すること、三分五分、乃至十分間ほどにして、口を開き

靜に長く之を伊吹くなり、ある限りを吹き出すなり。更に又鼻より吸込みて、此の如くすること、三度五度、乃至八度十度十二度十六度等に及ぶ。そのいづれの度數にても最後の時には、口よりは吹き出さず、全然腹内細胞内に吸込み吞込て、靜に全身の毛穴より出しつゝ、徐徐と唇を緩めつゝに出す也。否、最後の時には、吞み込み吸ひ込と同時に神を拜して、向はんとする所に行き、爲さんとする事業に執りかゝるなり。▲已に祓の祭を爲しつゝ、大菝戸神の靈を受け、我が根本我の直靈を張り分派我たる八千魂の汚と穢とを拂ひ裏伊吹を爲し、振魂を爲し、鎮魂を爲し、雄健を爲し、雄詰を爲し、表伊吹を爲し、神直靈神と化し、大直靈神と化し、否、本來我、即神たる神直靈神、大直靈神たる神體を發顯し得たり。

六四
已に神なり、神體なり、水に溺れず、火も踏むべし。於是乎川に行き海に馳せ、禊の祭を行ふ。然り、極寒中、白衣一枚にて馳せ行く也。▲禊の祭は海岸、又は川邊に於て、之を執行し、六月十二月の極熱極寒中に之を執行す。祭と共に、松杉檜を焚きて、炬火と爲し、その祭了はると同時に川に投じ、海に投じ、イーエッ。エイッ、と荒瀬荒濤を切り破りて、神龍の如く游泳し、歸り來りて、その炬火猛火を踏破す、之を稱して「火渡」と云ふ。或は水や潮を沸騰し、その熱湯を手にて掻き廻はす。之を稱して「探湯」と云ふ。或は銳利の名劍八口を楷子に組み立て、之に昇降す。之を稱して「八劍渡」と云ふ。夏は時に深山幽谷中に入り、千丈の瀑布に禊ぎして、之を執行することあり。之れ變例なり、冬は必ず海に限る。正

則としては、夏冬とも必ず海に於て執行する者とす。奈良平安朝以來本垂神道、兩部神道なる者起り、神佛混合の式を以て「火渡」、「探湯」等を爲すものあり。是れ唯だ形ばかりにして、その眞意を忘却す。前に云ふ所は純然たる日本太古神代の正式なりと知るべし、故に全くその形式内容を異にす。▲已に神たり、神體たり。之を證明するが爲に、海川に入り、水と湖とに通じ、宇宙絶對の根本大本體神なる天御中主太神の靈を受け、大稜威を受け、我が靈にそゝぎ、根本我なる直靈と、分派我なる八千魂との統一結晶しつる神直靈神たり、大直靈神たる照鑑證明を受くる者とす。▲火渡、八劍渡、寒氷、猛火を游泳踏破する者は、徒に是を以て神事の極致とするに非ず。一身一家一國の緩急の際、水火を辭せざる

神體を實顯せんが爲めなりとす。▲全身已に統一結晶して大直靈神たり。於是乎人類萬有に對せざるべからず。その人類萬有に對する時の我は茲に神直靈神たる位置に立つ、更に人類萬有を統一同化したる後ならでは大直靈神たることは得ざる也。▲その人類萬有に對して大直靈神たるに裏表二道あり。一▲裏道は鎮魂中に之を爲し、其本體を顯はし、天御中主太神と神慮り、神語るとを得。是れ哲學上に於ける觀念とは異なり、佛教の一念三千の止觀や、禪定成佛とも、同じからざる者と知るべし。茲には餘白なければ省略す。唯だ云ふ、是は此れ根本我たる直靈のみの活動なれば之を爲すことを得。直靈は太神の分靈その儘なれば也。▲表道は然らず、生を改め、代を更へ、境を換ふる千變

萬化に、神ながれに神流れつゝ、進行するに非ざれば能はず。而も人類萬有、いつも此に達せざるべからざると共に、終局は轉々茲に達して、大直靈神となり、天御中主太神と合體する者とす。神より出でたる者は、苦樂其極に達すれば、神を思ひ、神に還る。人類萬有は、神以上を思ふ能はず。神は人類萬有の根本大極たるを自覺すべき也。▲日本神代の垂示としては、達頂徹底自我を認めつゝ、宇宙根本大本體神に結晶合體する者とす。否、今日現在よりして、夙に結晶合體しつゝあることを自覺せざるべからざる也。▲自我を忘れ、自我を無くせんとするは、根本大本體神に結晶合體することの、常に空想妄念に馳せ、甚だ遲緩にして迂遠たるに至る者とす。是れ最も自警すべき所たり。それを活動大

活動せしめんが爲めにこそ、個々それぞれに自我を下賜せられつゝあれや。而もこの自我を忘れ、この自我を無くせしめんとすれば、始よりして、太神は自我を人類萬有に下し賜はぬ也。されば、我と吾身の自我を忘れ、自我を無くして、亦那的を悟り、那的に合體するを得べきぞ。自我なき者は、那等の活動も爲すこと能はざれば也。▲故に日本民族は須臾も自我を忘るべからず。人類萬有にも知らしめ、實行せしめざるべからず。然り常に我と吾身の自我を認めて、神體を發顯するを以て人生出世の一大本懐、一大本領と爲す。故にその家庭を齊へ、國家を治め天下世界を平一するも、亦一身を統一すると同般なりとす。▲家庭にありては、その第一生魂たる、根本自我中身自我の直靈たる主人

先づ神直靈神たることを自覺實行し、足魂たり、八千魂たる分派自我の家族を感化統一して、一家を代表する大直靈神たらざるべからず。一町一村一市一郡一縣として、その第一生魂たる、根本自我中身自我の直靈たる村長町長市長郡長知事が、先づ我と吾身が神直靈神たることを自覺實行し、その足魂たり、八千魂たる分派自我の村民町民市民郡民縣民を感化統一して、一村一町一市一郡一縣を代表し得るの統一體の大直靈神たらざるべからず。軍團としては、その第一生魂たる、根本自我中身自我の直靈たる軍團長師團長旅團長聯隊長大中小隊長、先づその軍團師團旅團聯隊大中小隊の神直靈神たることを自覺實行して、根本中身我となり、その足魂たり、八千魂

たる各派自我の一卒散兵、分隊、小隊、中隊、大隊、聯隊、旅團、師團、軍團を感化統一して、其一卒散兵分隊を代表し、小隊を代表し、中隊を代表し、大隊を代表し、聯隊を代表し、旅團を代表し、師團を代表し、軍團を代表し得る個相應の大直靈神たらざるべからざるなり。然り如何なる組合如何なる會社如何なる事業にても悉く此の如くに根本中身我あり分派我あり、その根本中身我と分派我との同化結晶統一するに非ずんば成立する者に非ず、活動活躍し得べき者にもあらず、獨り人生のみならず、人事のみならず宇宙萬有悉く是れ統一體なることを自覺すべき也。▲而して、その分派自我たる八千魂はいづれもその統一を破りて我儘に自己我のみを増長せんとしつゝあれば、根本我たる直靈の位置に立つ

者は須臾も油斷あるべからず。油斷ある時は統一を破る者が續々と派出し、收拾すべからざるに至る也。▲さてその分派我としては統一せられある時はいかにも苦痛を感じるが如きも、もしも統一を脱して快樂を得んとせば、唯にその快樂を得ざるのみならず、却てより以上の大苦痛ある者とす。是れ自己の分を盡さず、自己の天職責任を厭ふて去る者なるが故に、其大苦痛あるは、自から招く所にして、自然の制裁なりとす。見よ一朝の怒に堪えず、會社等を退く者の多くは、輾轉沈落しつあることを、或は一朝の怒りに堪えず、忿然官を辭し、黨を脱したる人の多くは、浮浪落魄しつゝあることを。或は軍隊を脱走すれば、軍法の嚴罰を受く、人の制裁なければ、天の尤めあり、いづれにしても、その分

を全ふし、その責任を全ふせざる者は、其制裁其尤めを免がるゝこと能はず。故に知るべし、その統一を破りたる時は、自から進んで大苦痛に陥たる時なりと。▲人類萬有は離羣索居して單一に孤立することを得ず、そのいづれに向ふとしても統一體たらざるべからず。故に現在の統一體を厭ふて他の統一體に向はんとせば、先づその現在の統一體に對する分派我としての自己相應の分を守り、自己相應の天職を盡し自己相應の責任を全ふすべし。自からその信用顯はれ自然と昇進の道も開くべく、亦他よりも歡迎せらるゝに至るべき也。寧他に轉せずして、現在の統一内にありて漸々昇進するの速にして確實なるには如かざる也。人類萬有いづれか、その大直靈神たるを欲せざらん、それに

は、先づ神直靈神として、個々の分限を守り、個々の天職責任を盡しつゝ、他より賞賛せられて、いかさまに神なり、人に非すと云はるゝまでの神體を發揮すべし。遂にはその身相應の大直靈神たるに至るべき也。▲根本我、中身我たる直靈の位置にある人々が、分派我を感化統一するに於ても、分派我たる八千魂の位置にある人々にても、均しく神直靈神たることを忘るべからず。日本は神州神國なり、その神なり、神體たることを發顯するには、神代より相傳の神事ありと知れ、祓と禊の行事即是也。日本民族は必ずや、祓と禊の行事を修めて、神たり、神體たることを實顯し、大日本皇國の大根本大中身我なる現神、大直靈神たる天皇陛下の分派我たる、八千魂、五千萬魂、八千萬魂として、大根本大

中身我たる 天皇陛下御統一の下に結晶同化して一身同體の大神體を發顯し、漸々次第に世界人類を同化統一する大直靈神たらざるべからざる者たることを大自覺大實行し、世界人類をして悉く神たり、神としての神體を發顯せしめざるべからざる也。是れ實に日本民族の一大天職一大責任なるぞ。否、獨り日本民族のみならず、世界民族も各自その天職責任を有し、夙に世界統一の首途に發軔し活動しつゝあるものぞ。特に太神の恩寵あることを感ずる日本民族にして、他に制せられなば、それ將た何の面目ある。同胞民族は神代以來宮中に奉齋する生魂大神、足魂大神、玉留魂大神の天啓默示を忘れたる歟。「天津神籬」と天津盤境との神傳垂示あるを知らざる歟。是れ實に 天照皇大神の

天壤無窮の御神勅と相待て表裏しつゝあるものぞ。「天壤無窮の神勅」は表にして「天津神籬」と盤境との神傳垂示は裏にして「生足留の三柱神」は表裏一貫の根本實體なるぞ。世界茫茫建國尠からずと雖此の崇高雄大深玄なる神勅神示神啓を有するの民族、それ將たいづくにかある一日も早く祓と禊との神事を會得し、自尊自重する所あれ。大日本民族の神躍りに神躍る活舞臺は已に開幕しつゝあるぞ。今や神人萬有悉く日本民族の一舉一動を注視し、贊美の聲を發せざれば、惡聲を發せんとす。幸機一發、禍機一發、機陸離閃電轟雷、我れそれ神たり、神體たらば亦何の恐るゝ所かある。駒の蹄の留る限り、船の艦の到る限り、白雲の墮向伏限り、青雲の靄翳極天壁の聳立極稜威大稜威の天照極天地十

表國驅り天翔りて、同化統一の大偉勳を奏し、神人萬有の大喝采大激賞大賛美の中に、世界無比の大神冠を戴くべき也。是れ人間無上の大快事に非ずや。豈に獨り日本民族のみならんや、世界民族は夙に此の壯舉を企て、此の壯舉を陰に陽に實行しつゝありと知れ。イーエツ。エーイッ。イーインニア。『天津神籙』と『磐境』との事は、大日本國體に、詳に説明あり。

日本民族の述懐

天地を隈なく照らす月と日の光を己が心ともがな。
 天津神國津神達みそなはせ思ひ猛びて吾爲す業な。
 大神大神稜威赫灼尊也哉我が行く道は眞幸ありこそ。

第二十六章 寒中祓禊の由來

神代以來、日本民族の祓禊の行事は、此の如き雄大宏壯崇高幽玄の意義ありて傳へ來れる者とす。然るに、奈良朝以後、儒佛の流行と共に、漸々湮滅したるの觀を呈し、その行事は、殆ど告朔の飢羊として、徒に形式のみ存し、六月と十月との二節に、形ばかりの行事執行せられつゝありたり。最も必要としたる所の寒中行事は、神事秘傳の人へのみ行はれたることとは昔よりして然りしなり也。その六月と十月との祓には、必ず禊流の心をこめて行ふべき者なりき。然るに、秘傳の人缺けて、次第に形式ばかりとはなれりけりな。寒中行事は、朝廷には十二月祓行事

ありたり。然るに、朝廷には今日猶十二月被の行事あれども、民間にそれと伴ふ寒行禊の缺けたるは、豈に絶代の恨事にあらずや。最も寒中禊は昔よりして、その道の人ならでは、民間一般には行はれしものならず。獨り神事に熱烈にして、向上靈化し神化し己を修むると共に世を導かんとする人々が、最も秘密に授受せられたる者とす。それ唯だ秘密なるが故に、漸々その人を失ひ、その傳の缺けんとするまでに至りたる所以也。この禊流の授受は所謂語部なるものにして、口授密傳に屬し、文字文章に顯はすことなし、故に其人を缺くと共に、其傳の失せざるを得ず亦其人あり、その傳あるも、その文字に乏しき時は之を認めて子孫に遺すことも、世に公にすることも能はず。奈良朝以後は、世多くは、

漢文に走り佛學を修め、世は正に漢文佛學の時代となり、漢文佛學に非ざれば、立身出世すること叶はず、權勢名利の念盛なるは、人の常なるが故に、世を舉りて、漢文佛學に歸し亦日本在來の古傳を顧みる者なし。是を以て禊流の如きも、僅に昔を忘れぬ故老の人々に口授密傳せられつゝありしに過ぎず。その人々は固より文字なかりし人々なるが故に、その傳も漸次第山間僻地に流れ行くに及びたる者とす。已に古事紀を編纂する時すら僅に一の稗田阿禮ありて傳はることを得たるに過ぎず。然れども、一の稗田阿禮の傳のみにては全からず、その語部として傳はり居る者猶且尠しとせず。是れ更に日本書記の編纂なかるべからざる所以也。舊事記の如きその書は偽書なりと雖、内容の實

八〇
は偽造にあらず、只、當時民間の識者が古事記、日本記以外の語部より聞き取り、その傳の湮滅せんことを概き二記と共に後の世に傳へんことを欲し、朝廷の書に假托して作りたるの微衷に出づ。故にその書は假托なりと雖、その事實は正傳也。そは、三紀皆その傳を異にすると共に、相互に關聯す。相待て相讀まざれば、孰れも全き解釋を得べからざるに徴して明かなり。特に古事記は「宇宙開闢の神傳」にして、書記は「地球開闢の神傳」と共に、舊事記は「客觀的創世の神傳」なりとす。禊は實にこの三記より源泉流出しつゝある所のものたり、禊の神事を密傳せられたる者ならでは、三紀を解することも能はず、神代の淵源する所をも會得し得べき者にあらず、本居平田諸大人の解釋は言語文字の

解釋としては、其勞固より尊重すべきも、神と云ひ、靈と云ひ、魂と云ふ事に至りては、殆ど明確なる解釋を下すこと能はず、是れその傳を受けざるが故に、この不可能に接着したる者とす。只その言語文字の上より眺めたる者なるが故に、活きたる威嚴ある神と靈と魂とを拜すること能はざりしものとす。禊流の神傳を受けざれば、斷じて三紀の會心體得は何人と雖、不可能の事に屬す。況して其他諸流の神道に於てをや。

第二十七章 奈良朝以前の禊秘傳

徳川時代に、奈良朝以前の神傳聖德太子時代まで傳はりし神傳の寫書、京都のある書肆に横はる。平田翁の壯年、之を見て購はんとするも、囊

中空し、走りて旅館に歸り、代價を用意して、書肆に至れば、寫書已になし
 主人に尋ぬれば、先刻筑紫の人之を求め去ると。翁大に殘念に想へど
 も、是非なし他日その事を玉かつまかに認めて、思出の種を遺しぬ。筑
 紫の人とは外ならず、吾家の父祖なり、我家は神職の家にはあらず、少し
 く歴史ある家系なれども、茲に述るも、いかゞ只古よりの神傳を修めつ
 つ郷黨にも知られぬやうに秘め置きて、その世の到るを待ちつゝあり
 し家なることを述べ置きて已みなん。家に秘傳ありたると共に、亦八
 幡大神靈顯の根本勝地たる馬城山中に於て、その人に會ひ、禊流の神傳
 全く愚なる我身に傳はるの喜びあるに至る。是れ吾がその愚を顧み
 ず、猛然擲起し、世界に比類なき神代思想、神代行事を鼓吹唱道する所以
 なりとす

第二十八章 世界各國の祓と禊

支那に――弗滌あり、禊の祭あり、印度に――灌頂あり、猶太に――バプテスマあ
 り。然れども、神子佛子たる入門のしるしとして、水や香水やを頂上に
 そゞぎ、或は川に洗ふの形式存するに過ぎず。日本古代の禊のそれに
 比しては、その内容固より論ずるに足らず。是れ皆、日本古代の祓と禊
 の分派示流たることは、我が別著日本神代の祓禊に就て知るべき也。

- 一 本篇に祓禊の行事としては、ほんの一端に過ぎざる者とす。例へば重に主観上の神のみを説き、客観上の神には説き及ばず。未だ以て祓戸神の全體を説明し及ばざる者とす。而して表裏伊吹、振魂鎮魂、雄健、雄詰、等もその形式内容等を仔細に説示するの暇なかりし等の如き即是也。
- 一 世界人類が、宇宙萬有の根本大本國體を尋ねつゝあるは、古今を通じて然りとす。獨り宗教のみならず、哲學科學としても亦然り、唯その觀察究明の道を異にするが故に尋ね得たる所の根本本體の同じからざるに過ぎず。而もその觀察究明の極地を更に漸々向上進行しつゝある時は、いづれも、同一根本大本體に到着歸結する者とす。宇宙萬有の根本大本體は絶対唯一也、二亦三あるべき者ならず。二亦三あるべき者とせば、是れ未だ根本大本體とするに足らず。
- 一 宗教宗義に於ても、亦然り、儒教、波羅門教、佛教、猶太教、基督教、回々教、メサヤ

- 教等鈔からずと雖、唯だその形式を異にするに過ぎず。究意する所は是也。宇宙萬有の根本大本體に同化するにあり。委細は別著、大日本世界教宣明書、世界教要義、世界教宣言書、宇宙の根本大本體、世界古今諸學諸教の批判。日本民族宇宙觀、伊吹論、靈魂觀等に就て、會得する所あれ。
- 一 日本神代の垂示は、世界古今の教學に超絶す。而も支那、印度、猶太、希臘、羅馬、歐米等に發達したる諸學諸教の形式のみに走りて、自國の形式を放棄し彼の學祖教祖のみを崇拜して、我の神祖を忘却す。是れ殆ど精神上の亡國たらんとす。同胞民族何ぞそれ概然として猛省する所なきや。
- 一 道には彼と我との別なし、我にして劣る所あらば是非なし、勝れる後に喜んで服従すべし。而も勝る所あるの我を以て劣れる所の彼等に服従するは何ぞ。是れ導くべき天職責任ある身を放棄して導かるべき位置に在る所の彼等に盲従するに均し、何ぞそれ其身を輕することの太甚しき

一 根本大本體の天御中主太神より照鑑はさげ、却て支那人印度人猶太人斯波人亞刺比亞人希臘人羅馬人歐米人の堅忍奮闘を嘉賞して、日本民族の信仰勇氣なきを、いかに憐むべき者よと、見そなはしつらむ。豈に恐入るべき次第ならずや。恐入ると共に、大に自警自覺し、世界人類教導の天職責任を全ふせざるべけんや。

吾等同人は、年年極寒中の一七日間、相州相模灘の荒海に於て、被禊の行事を實行しつゝあり。漸々全國に普及し、世界に普及せんことを期す。獨り海國男子として然るのみならず、山國男兒としても、人類一般に實行せざるべからざる者とす。否、支那に、弗あり、禊あり、印度に灌頂あり、猶太にバプテスマ、阿刺比亞に砂撒等のある如く、悉く日本神代被禊の分派末流なりとす。委細は「日本民族の被禊」に就て會得せられたし。

明治四十五年六月六日

稜威會同人拜記

いつもがも神の稜威に禊ぎして光る我身は眞幸ありこそ
くもりなき御代の光を日の神はなほ清かれと照しますらむ
天照神の光を敷嶋や日本島根は榮ある國
敷島の日本櫻を外國にうつしながむる世とはなりけり

神社崇拝

神

光^{ひかり}照^{てら}空^{そら}天^{あま}し 天^{あま}日^ひ國^{くに}
 ら し に 照^{てる}る 津^つ出^らは
 ぞ し ま し 輝^{かがや}神^{かみ}し め 日^ひる 日^ひ
 神^{かみ}か し ま す き ば し つ 嗣^{つぎ}國^{くに}の
 の の の 國^{くに}の ぞ 國^{くに}
 時^{とき}は 今^{いま} 矢^や竹^{たけ}心^{こころ}
 いざ ひ き 放^{はな}て の の の
 大^{おほ}梓^{あづさゆみ} 黙^{もく}そ 人^{ひと}ひ 國^{くに}日^ひ日^ひ日^ひ
 丈^{ますら}弓^{ゆみ} 示^しの の の 皇^みの の の
 夫^をの 世^よか 皇^み子^こ神^{かみ}本^{もと}
 友^{とも}の 界^かし る 子^この の の
 る り を の ぞ の の の

緒言

「神社崇拜」は、別に發刊すべき計畫なりしかど。この度、附録として、合本發刊したる者とす。

一中には、時に重複する所あれども、却て彼れ此れ相待ち、會得するの便あるべき歟。

一いつれにしても、大日本最古の神道は、世界列國、東西古今の宗義、學說と、その根本義を異にす。奈良朝以後、支那に、印度に、將た歐米にのみ走りたる人々は、大日本固有の大信念ながらも、殆ど忘却し、異様の感あるべし。而も支那、印度、歐米には走り盡したり、今は是れ我に復りて、大自覺大實をすべき時におらずや。

稜威會同人拜記

神社崇拜

川面凡兒口述

新村樂水筆記

(一) 人類魂民族魂個人魂の異同

世界の人類としては、人類一般に通じたる靈魂あり、民族として、その民族一般に通じたる靈魂あり、個人としては、個人に現はるゝ所の靈魂あり、人類一般に通じたる靈魂とは、人類一般に歸趣する處の目的あり、その目的を認識するの威靈、その目的を達する處の威靈が、即ち人類一

九二
般の靈魂である。人類は禽獸にあらず、草木にあらず、故に禽獸の目的とは異り、草木の歸趣する處とは同じからざるなり。その生活狀態の同じからざると共に、その生活狀態を維持し、發達する點に於ても、禽獸の靈魂とは同一にあらず、これその人類としての靈魂は、禽獸草木としての靈魂と異なる所あるを知るべき也。民族一般の靈魂としては、民族各自の靈魂あり、その位置境遇に伴れて、各自の靈魂は自ら異らざるを得ざるものとす。人類一般の靈魂を以て、直に、民族各自の靈魂に應用せんとするも、各自の境遇に於て、是を發揮實行すること難し、これ世界魂あると共に、亞細亞魂あり、亞弗利加魂あり、歐羅巴魂あり、亞米利加魂等のある所以にして、更に日本魂あり、支那魂あり、印度魂あり、波斯魂あり

九三
埃及魂あり、獨逸魂あり、佛蘭西魂あり、英吉利魂あり、伊太利魂あり、埃利亞魂あり、露西亞魂あり、阿蘭陀魂あり、瑞西諸國魂あり、希臘土耳其等の國魂ある所以なり。個人魂とは、個人個人に有する所の靈魂にして、是れ又、個々分々の位置、その境遇に應じて、その活動を同ふせず、老人魂と青年魂とは、その活動を異にし、富貴魂と貧賤魂とは、その活動を異にし、女性と男性とは、その活動を同ふせず、各自各自に、その境遇分限に應じて、悉くその活動は、千差萬別たりつゝあるものとす。然れども、個人魂として、民族魂として、人類魂として、家庭魂として、國家魂として、世界魂として、その本を究明すれば、等しく、これ同一の靈魂にして、唯その人類魂が分派分泌しては、民族魂となり、民族魂が分派分泌して

は、個人魂となり、世界魂が分派分泌しては、國家魂となり、國家魂が分派分泌しては、家庭魂となりつゝあるに過ぎざるを以て、只その靈魂の量に於て、大小あると共にその活動の點に於て、厚薄の別あるに過ぎないのである。究明すれば、均しく、これ靈魂なり、同一の靈魂なりと知るべき也。

二二 主觀上の靈魂と客觀上の靈魂

已に個人魂あることを知る時は、民族魂あるを知らざる可からず、已に民族魂あるを知る時は、人類魂あるを知らざる可からず。已に人類魂あるを知る時は、更に亦萬有魂あるを知らざる可からず。已に家庭魂

あるを知る時は、國家魂あるを知らざる可からず、已に國家魂あるを知る時は、世界魂あるを知らざる可からず、已に世界魂あるを知る時は、宇宙魂あるを知らざる可からざる也。個人魂と、民族魂と、人類魂とは、不二一體なるが如く、萬有魂と、人類魂、民族魂、個人魂とは、又均しく不二一體にして、唯その量の大小と活動の厚薄あるに過ぎざる者とす。家庭魂と、國家魂と、世界魂との不二一體なるが如く、宇宙魂と、家庭魂、國家魂、世界魂とは、亦均しく、不二一體にして、唯その量に大小あり、活動に厚薄あるに過ぎざるものたることを自覺すべき也。然り、客觀すれば、宇宙魂なり、世界魂なり、國家魂なり、家庭魂なり、主觀すれば、太神魂なり、萬有魂なり、人類魂なり、民族魂なり、個人魂なり、禽獸蟲魚草木魂等なりとす

唯宇宙魂が分派分泌して萬有各自の世界魂となり、萬有各自の國家魂となり、萬有各自の家庭魂となり、境遇魂となり。大神魂が分派分泌して萬有魂となり、人類魂となり、民族魂となり、個人魂となり、禽獸蟲魚魂となり、草木木石魂となり、雲烟雨雪魂となり、百千萬億の菌魂たりつゝあるに過ぎざる也。究明すれば、その性を同ふし、その質を同ふしつゝありと雖も、たゞ、その活動を異にすると共に、その状態の千差萬別たりつゝあるに過ぎざる也。客觀しての境遇に千差萬別あると共に、主觀しての活動も千差萬別たりつゝある所以とす。究明すれば、同一靈魂なり、その間に別物ありて混じつゝあるにはあらず、唯、その分派分泌の厚薄大小精粗強弱等につれ、相互に主觀し、相互に客觀されつゝ、その活

動を異にし、その境遇を同ふせざるに過ぎざるものとす。

(三) 精神と物質との不二一體

これ迄の宗義學說としては、東西古今ともに精神と物質とを別様に見做し、精神を無形とし、物質を有形とし、あれども、これは、實に、その究明の足らざる處より誤解したるものである。精神と物質とは決して二物二様に對立して在るものでない。精神も質あり、體あり、物質にも質あり、體あり。然るを、精神の質とは、餘りに稀薄微細にして、人間の五官に上らざるが故に、無形なるものと誤解し、物質は粗大にして、五官に上るものなるが故に、有形と見做し、精神と物質とを全く別物に見るに至

りたるものとす。然るに物質と雖も、刻々蒸發して、熱却冷却し漸々、瓦斯態に變じ、氣態に變じ、無形のものとなり、五官には上らざるものところ變じつゝあるのである。然れども、亦その五官に上らざる處の氣態とか、瓦斯態とか云ふ極小微細なるものも、漸々結晶して液態となり、流態となり、固形態となりつゝあるなり。人間身の體温の如きも、念々刻々蒸發飛散しつゝあるものは、それ丈身體が衰退して、無形のものとなしつゝあるのである。然れば、肉體も有形なるものとはばかりは言はれないのである。空氣は目に見えぬから形がないとは、言はれませんが、言はれないは、目に見えぬから形がないとも言はれない。目には見えずとも空氣にも、元素として、分子として、原子として、原々子としての形が實在して

居るのである。電流にも、光として、光波として、電子とし、電々子として、極小微細なる形を有して居るのである。五官に上るから形がある、五官に上らないから形がないとは、實に幼稚なる究明であつて、形あるものも飛散しては極小微細なるものとなつて、五官に上る事能はざる處の無形なるものとはなり、五官に上らざる處の無形なる光とか、氣態とか云ふ様なものも、漸々結晶して五官に上る處の有形になりつゝあるのが、何よりの證據である。それで精神と物質とを二様二物に見做しつゝありたるのは、全く幼稚なる究明としての誤解であると云ふことが判然したであらう。されば精神とは、稀薄微細なる質と體とを有するものにして、物質とは、極小稀薄なる精神が輪廓を漸々膨脹したる結果

に過ぎざるものにして精神と物質とはその實不二一體である。同體不二なるものである。然らば精神と云ひ物質と云ふものは將來に於ては必ずその意味を改めねばならないのであると共に、この精神と物質との表はれ出づる處の根本本體を尋ねばなりません。然るに、世界各國東西古今に於て、その根本本體を説明し得たるものはないのである。それで世界列國何れの字書を繙きてもその名稱も、文字もない。獨りこれあるのは、日本ばかりである。日本に於ては、神代の昔よりして夙にこれを發見し、その實體を自覺し、その名稱も存在して居るのである。

(四) 日本民族の人身觀

日本の神代に於ては、この精神と物質との現はれ出る處の根本本體を稱して、靈と云ふ。此靈は、全宇宙に充滿して居るものである。全宇宙が即ち靈であるなり。然るにこの靈の出づる處の大根本、大本體あり、この大根本、大本體より現はれ出る處のものが、全然彌淪して宇宙に充滿しあるのであると共に、その靈と靈との活動に自ら勤怠を生じ、勤怠に伴はれて、強弱を生じ、その勤むるもの、強き者が怠るもの、弱き者を吸収結晶して、人類萬有の個個體が發現しつゝあるのである。その勤むる者、強き者が、他の怠る者、弱き者を吸収して、いつも微細なる個體を成す。これを稱して魂と云ふ。魂とは「タマシヒ」なり「タマシヒ」とは、水の溜るが如く、靈の溜まりたるものである。水としては同一なれども、水の溜

一〇二
まじりかたには、大小厚薄、方圓長短、精粗等のあるありてその形を同ふせざるが如く、人類個々萬有個々に形を同ふせざるのである。靈として同姓同體にして、平等なり、普遍なり、其の靈の溜まりたる魂は、夫ぞれ形を異にするが故に、差別あり、個性なり。而して、この魂を日本では和魂と云ふ、世界列國に於ける精神と云ふに相當するのである、またこの魂の勤むるものと怠るものとの自ら生じ來ると共に、勤むるものは強くなり、怠る者は弱くなり、その勤むるもの、強きものは他の怠る者、弱き者を吸収して、一の個體を現はし來る、この個體が即ち人間の五官に上る處の人畜草木萬有なるものである。この魂の結晶したるものを世界列國に於ては、肉體と云ひ物質と云ふ。日本では荒身魂と云ふ、荒

一〇三
身魂と云ふとは、世界列國で云ふ處の肉體、即ち物質なるものに相當して居るのである。荒身魂とは、アラワミと云ふて、現はれ、明らかに五官に觸るゝ處を意味したものである。又荒とは、アラヒと云ふ意味にて、粗大、堅固の意味である。それで、荒身魂と云ふものは、一の靈の主動して、他の靈を吸収する時は、その主動の靈を直靈と云ふ。直靈が溜まりて、他の直靈を吸収して、魂となる、その魂を和魂と云ふ、和魂と云ふ時は、直靈と他の一の靈が抱合し居るものにて、一の靈の中に直靈が主人公として、鎮座し居るのである。この和魂が、他より數多の和魂を吸収結晶して個體を現はす、これを稱して荒身魂と云ふ。この荒身魂には數多の和魂が群集結晶し居るものにして、その中身に和魂が主魂とし

て鎮座しあるのである。故に荒身魂の内に和魂あり、和魂の中に直靈があるのである。荒靈は五官に上れども和靈と直靈とはあまりに極小稀薄なるが故に、五官に上ることは出来ないものである。然れども五官に上らないと云ふても、荒魂の内に實在しあると云ふとは、荒魂それ自身に感知することが出来るものである。又荒魂の内に在る處の和魂が我れ自身を認むるが故に、荒魂も和魂の形を見ること能はざるも、自らその那的かの潜みありと云ふことは認め得るものである。その如く、和魂の内にある直靈は、和魂それ自身には直に之を見ること能はざるも、更に何的かの存在しあることを自ら感知せらるるやうになつて居るのであります。よし、和魂が感知すること能はずとするも

直靈それ自身が自身を自證しあるが故に、和魂も亦その内より衝動せらるゝに就て自ら那的か存在し居ると云ふことを感知せねばならぬ。いものである。獨り和魂のみならず、荒魂それ自身も、間接に内よりの衝動を受け、和魂を通して、和魂以上に意識——良心——以上に、更に那的かの實在しつゝあることを自知せねばならぬやうになつて居るものであります。されば、日本民族の人身觀は、この肉體が直ちに魂なり、荒身魂なると共に、この肉體魂の内に和魂と云ふ魂があり、この和魂の内、に復直靈と云ふものが實在して居るものである。荒魂は荒魂として、和魂は和魂として、和魂は和魂として、和魂として、和魂として、和魂としての働きがある。それはその一身の構造上に就て、恁くの如きの働きがあるのである。

根本たり中身點たり分派分身點たり更に中身と分派とに關聯する段階點等ありてその質を異にしその體を異にしつゝありと雖もこれを究明する時は同一の魂なり靈なり同一の靈魂と云ふに歸着するのであります。(明治四十五年五月廿七日午前十時筆記)

(五) 人類萬有と直靈和魂荒魂との關係

獨り人類が直靈と和魂と荒魂とより成立して居るのみならず萬有悉く直靈と和魂と荒魂とより成立して居るのである。而して宇宙には宇宙としての直靈あり和魂あり荒魂あるが如く一塵一埃一毛一菌に至るまで更に一元素一分子一原子一原々子に至るまで悉く直靈あり和魂あり荒魂があるのである。更にこの直靈には直靈としての和魂あり荒魂あり。和魂には和魂としての直靈あり。荒魂あり。荒魂には荒魂としての直靈あり和魂あり。更に荒魂の分身分體としての一節一骨一細胞一神經に至るまで個個分分に悉くそれ相應なる直靈あり和魂あり荒魂等の具足して居るものたることを承知すべき也。

(六) 主客位置を變ずれば同一靈魂

客觀すれば元素なり分子なり元子なり電子なり原々子なり電々子なり肉體なり物質なれども。元素分子原子電子肉體物質等のそれ自身が自身に主觀する時は悉くこれ靈なり魂なり直靈なり和魂なり荒魂

なりである。東西古今の宗義學說として、人間にのみ主観客観を有し居るものとして、人間以外の萬有をば悉く、人間より客観したる處を以て、それらの判断推定を下しつゝあるなり。それは甚だ自分勝手な判断推定たるに過ぎず、是れたゞ人間より人間を本位として客観したる判断推定に過ぎずして、人間の本位の判断推定としては、その通りなるべきも、人間本位の客観的判断にては、萬有それ自身の自性を明にし得たるものとは言ふべからず、人間より大根を客観すれば、人間の滋養分たるべき大根が上等にして、人間は、これを切り、これを食す可きも、大根それ自身に主観するときは、餘り喜ばしきことにはあらざるべし。若し、人間以上のものありて、人間を切り、人間を食ふものあらば、人

間は、如何にその苦痛を感すべきぞや。元來、人間にのみ獨り主観客観あるにあらず、萬有悉く主観客観を有し相互に主観し、相互に客観せられつゝあるのである。故に、人間が一草一木を客観して究明し、分析し、判断したる處のものと、一草一木それ自身に主観する處とは、全然その趣を異にして居る。人間が客観して、元素、分子、原子、電子なりとするも、それは人間の客観的推定にして、元素、分子、原子、電子それ自身に主観する處とは、全然その趣を異にして居ることを知らねばならぬ也。人間に荒魂あり、和魂あり、直靈あるが如く、萬有にも悉く、直靈あり、和魂あり、荒魂ありと云ふことは、亦、以て疑ふべき餘地なきにあらずや。故に曰く、人間より客観すればこそ、元素、分子、原子、電子なれ。|| 元素、分子、原子、電

子それ自身に主観する時は、均しく之れ靈なり、魂なり、直靈なり、和魂なり、荒魂なりである。人間より客観すればこそ、一草一木、一石一砂、一塵一埃なれども、草木、石砂、塵埃等のそれ自身の主観する時は、均しく、これ靈也、魂也、直靈也、和魂也、荒魂なりである。人間より客観すればこそ、水は平波鏡の如く見ゆれども、水それ自身に主観する時は、滴々、個個分々、微々、それ／＼の菌あり、蟲あり、靈あり、魂あり、靈魂あるものである。故に曰く、人間萬有均しく、是れ靈也、魂也、靈魂也と。

(七) 顯幽富界の感應道交

人間各自が自己に靈魂あることを知る以上は、萬有各自にも、亦、靈魂あ

ることを知らねばならぬと共に、大宇宙にも、亦、その大靈魂あることを知らねばならず。然り、何人も、その困難苦痛、若しく快樂の極度に達する時は、我と我身に、那的か潜在しつゝあることを知ると共に、宇宙にも、亦、那的か、一種の威靈が存在しつゝあることを自知するものである。宇宙に一種の威嚴あるを知り、自己に那的かの存在し居ることを知る以上は、萬有各自にも、亦、その那的かの存在しつゝあると云ふことを知らねばならぬ也。宇宙に存在する威嚴とは、神にして、自己と萬有とに那的かの存在すると云ふことは、靈魂のことである。人間の死と云ふことは、全く、この直靈が和魂を脱し、荒魂を出づるからである。出でたる直靈は、その人の世に於ける善惡の行爲に伴れて、行く可き處の先方

二二二
に向つて行き去るなり。而して、和魂は、この世に留まり、子孫の祭るものあれば、その祭る處の靈代たる御幣なり、位牌なりに宿りつゝ、子孫の祭を受ると共に、子孫を守りつゝあるのである。荒魂は、墓所に留まりて、また子孫の祭を受けつゝあるものとす。然れども、和魂も、荒魂も、子孫の祭絶ゆる時は、漸々直靈の後を追ふて、直靈の在る處に向て去りつゝ、遂には以て直靈に同化するものである。また、荒魂は、烟となり、土となり、水となり、火となり、氣態となりて飛散しつゝあるが如きも、これは人間より、客觀したる状態にして、烟や、火や、土や、水や、氣態やのそれ自身が主觀する時は、人間の客觀したる如き、烟にあらず、火にあらず、土にあらず、水にあらず、氣態にあらず、悉く、これ靈也、魂也、自己性格を有しつゝ

あり、自我を有しつゝあるものである。是れ亦、直靈の留る所に向て去りつゝあるものである也。子孫これを祭れば、その祭る所の祝詞や、經論は、和魂も聽き、荒魂も聽きつゝ、その祝詞、その經論に感化しつゝあるを以て、十年、二十年、三十年、五十年、乃至百千萬年の後までも、漸漸次第と先方の直靈の後を追ふて同化しつゝあるが故に、先方の直靈の爲めには、その同化し來る處の荒魂、和魂は、悉く幸魂となりて、非常なる愉快を受くると共に、非常なる伴福となるものである。是れに反して、子孫のこれを祀るものなき時は、祝詞の聲も聽かず、經論の聲も聽ざるを以て、彼等は、その食に餓へつゝあるが故に、自然と他の魂を犯すの罪を造りつゝあれば、十年、二十年、三十年、五十年、乃至百千萬年の後、先方の直靈に

追ひつき同化するの際に於て、先方の直靈には、悉く禍津毘となり、惡氣惡魔となり、非常なる苦痛を感ずると共に、非常なる災難に遭遇するものとなる也。さて又子孫がこれを朝夕に祭り、或は一年祭、二年祭、三年祭、五年祭、十年祭、二十年祭、三十年祭、五十年祭、乃至百千萬年祭と祀りつあるときは、その朝夕の祭と共に、利魂も、荒魂も、祝詞の聲に化し、經論の聲に化し、愉快を感ずると共に、その感ずる處の愉快なる伊吹は、刻々先方の直靈に通じ、直靈も亦愉快を感ずると共に、その感じたる處の愉快の伊吹は、和魂に來り、荒魂に來る也。直靈の愉快なる伊吹を受けたる和魄と、荒魂とは、更に一層の愉快を感ずると共に、その感じたる處の伊吹は、悉く、我を祭りつゝある所の子孫の全身に泌み來りつゝあるも

のとす。子孫は、是れが爲めに、なんとなく、我と我身に愉快を感じ、その感じたる處の伊吹は、一家に充滿し、一家平和の世界を開くと共に、其の交際する處の親戚朋友にまで、その伊吹は傳はり行き、その親戚朋友、知人、郷黨の人々までをして、なんとなく、我に交るの愉快を感せしむるに至るものである。子孫が、先人の祭を爲したる後に於て、なんとなく、言ふに言はれぬ愉快を、我と我身に感ずるものは、全くこれあるが爲めである。これ獨り日本神道に於てのみ、神々の垂示せらるゝ處にして、未だ佛教にても、基督教にても、世界のあらゆる宗教、哲學、道德、倫理學等に於ても、説明すること能はざる所である也。

(八) 顯幽感應の杜絶と國家の自滅

先人の靈を祀り國家に勳功ある人々の靈を祀ると云ふことはその子孫たり國民たるものゝ自然の責任なり天職なり。先人の恩を忘れ勳功者の恩を忘るゝと云ふことは子孫としては耻づべきの行爲なると同時に、かゝる子孫の永く平和なる家庭を維持し得べき者にあらざると共に國民の永く平和なる國家を建設すると云ふことは斷じて出來ないものである。日本の家庭には靈代あり位牌あり町村には産土の神あり氏の神あり郡縣國家には大中小の官幣社國幣社を初めとしてそれ〱鎮座守護の神々を奉祀しつゝあり。世界茫茫國を建て家を

造る者少なからずと雖も、そのよく先人の靈を祀り國家の勳功者の靈を祀りて神と仰ぎその恩を紀してこれを慕ひ其の勳功を紀してこれを慕ひ永く之を忘却せずしてその恩その勳功を慕ひ亦その徳に化すると共に、その子孫たる者が我も亦第二の神たらんとしつゝあるものは世界蒼茫廣しと雖も實に我が日本のみである。彼等の家庭には靈代なく位牌なく彼等の國家には彼等の國家を建設したる偉人を神として祭る者なくたま〱祭る者ありとせば、その國には因も縁もなき他國に現はれたる神佛を祭るに過ぎず。然らざれば開國の人若しくはその國に教を立てたる人等を紀するに一の紀念碑を建設するに過ぎざる也。その先人の靈と子孫の靈との感應道交する連絡を斷絶し

或は、開國者の靈と、その國家に勳功あるもの、靈と、國民同族の魂との感應道交する道を斷絶しつゝある也。故に、その國は、悉く興亡常なく、一代開國者の宗廟若しくは、紀念碑は、後代開國者の子孫の爲めに破壊せられ、若しくは、是を祀り、これを慕ふ者、漸々滅亡するに至るのである。豈憐むべき次第にあらずや。更に紀念碑を建て、其功績を紀念する者とせば、何ぞ進んで更に家に靈代を設け、村落郡縣に神社を建て、其靈を祭りて神と爲し、其恩を紀して、其德に化し、顯幽感應相續するの大道に上らざる歟。彼等は、悉く先人感應の道を杜絶す、その家庭國家の興亡常なきこと、怪しむに足らざる也。

(九) 宇宙根本神と先人及立勳者

人類救済の神として他國に現はれたる處の神や、佛は、全宇宙の根本本體なりとして、これを信じ、これを祭るを見る。これを信じ、これを祭るはその人の信仰として、その國民の信仰として、敢て不可なるにあらずと雖も、徒らに、目前我身の一身のみを救はれんとして、遠き宇宙根本の神のみを祀るのは、いかが。故に先づ以て近く我身に直接なる恩あり愛ある父祖先人の靈を祀り、直接その國に勳功あり、德化ある處の開國者建勳者の靈を祀るこそ、遠き宇宙根本神の大御心たることを知らざる可からず。先人なり、開國者なり、建勳者なりは、等しく宇宙根本大本

體神の分靈分魂分身にして、この分靈分魂分身を祀り、この分靈分魂分身より通して、宇宙の根本大本體神に近づくの正道たることを知るべきである。其の身がその根本大本體神に直に救はれて未來に於て神たり佛たらんとするよりも、先づ以てその先人を神として祀り、開國者勳功者を神として祀り、而して我身も亦第二の神となり、後世子孫に祀られつゝ、この代に於ての神たり家の神となり、村の神となり、郡の神となり、縣の神となり、國家の神となり、大小の別こそあれその身相應にこの代に於ける神となりて、而して後に更に未來に於ても神たるこそ、初めて我も亦根本大本體神の分靈分魂分身たることを證明し得たるものにして、是れ實に根本大本體神の大御心なるものとす、世界茫茫

國を建つること多く、家を成す者少なからずと雖も、愆くの如く宇宙根本大本體神の大御心を體得實行しつゝあるもの、日本民族を除くの外、それ將た何處にかある。愆くの如き教を示すこと能はざるの宗教、宗義ありとせば、その奉せる處の宇宙根本大本體神と云ふものは、未だ以て根本大本體神とするに足らざる也、僅かに根本大本體神の一角一部分を拜み得たるものにして、世界人類一般に通ずるだけの教理たる價值なきものたるを知る可き也、眞實宇宙の根本大本體神に同化し行く教としては、日本傳來の神の教にあらずして、それ何處にかある。日本神の教は、獨り日本ばかりにあらず、世界を通じて教へざる可からず、奉せざる可からず、行はざる可からざるものとす、日本の神の教は、直

に以て世界教たることを自覺すべき也。

(十) 天照大神と幣

伊勢の大廟より、全國に頒布する處の靈代を、大幣と云ふ。又サとは、又は御靈と云ふ意味にして、サは漣砂磔五月雨と云ふが如く、こまかに分流したるものたることを意味する也。故に幣とは大廟の御靈の分流して、五千萬魂となり、五千萬戸に神宿りつゝあるものとす。天照大神は太陽界より天降りましましたるものにて、日本民族が太陽を拜するの儀は、太陽そのものをそのまゝに拜するにあらずして、太陽の内にての主神たる天照大神を拜するのである。人間より客觀すればこそ、太陽は

光なり、熱なり、火なりと雖も、太陽それ自身に主觀する時は、光にあらず、熱にあらず、火にあらず、均しく、これ靈也、魂也、靈魂一致の神也、猶ほ、人間より客觀する時は、水なれども、水それ自身に主觀する時は、水にあらず、均しく、靈也、魂也、靈魂一致の體にこそあれ。太陽は熱也、光なり、火なり、人類生物は、生存すべからずと云ふ歟。然らば、水は極寒にして、人類生物は、生息すべからざるもの也と云はざる可からず。然るに人類こそその冷、その寒に堪えざるなれ、水の内には、あらゆる魚類あり、獸類あり、蟲類あり、若しくは海苔、梅松等あらゆる植物まで、其の海底に繁殖しつゝあるのみならず、水の滴々中にも、それ、微細なる菌あり、蟲あり、潮の滴々中にも、それ、微細なる菌あり、蟲ありて生存しつゝあること

を知らずや。人間こそ生息することを得ざれ、水には水相應なるものありて生息しつゝあるが如く、火には火相應なるものありて生息しつゝあるものと知るべき也。太陽には、太陽相應の生物ありて、それ〴〵生息しつゝあること、また疑ふの餘地なきにあらずや。人間を本位として人間の客觀したる處のみを以て、そのもの〴〵自性を解し得たるものと思はゞ、とんでもなき誤謬なること、已に大根の比喩を以て説明したるが如し。太陽界の天照大神の分靈が天降りて、伊弉諾尊に宿りその宿りたる分靈は、直靈となりて、伊弉那美尊に遷りて、伊弉那美尊の胎内にある和魂と抱合合體し、更に八千魂を吸収しつゝ、荒魂を構成し茲に、この豊原の瑞穂國に神現はれ給ふたるものである。而して、こ

の世の神業終ると共に、その直靈は、太陽界にまします所の本體たる天照大神に復歸りまして、合體し、其和魂は、伊勢大廟に鎮座ましますと共に、その大廟の和魂の分靈は、宮中賢所に鎮座まします、更に大廟の和魂は分靈ましまして、五千萬戸に神宿りましますつゝあるのである。各村社、各郷社、郡社、縣社、國津社、天津社の神々は、悉くの如く、皆その八百萬の天津神、國津神の和魂の鎮座なると共に、亦和靈の分靈、分魂の鎮座たるものにあらざるはなき也。而して、此の代に於ける天照大神の荒魂は、伊勢の荒宮に鎮座ましまして、つゝあると共に、各村社、郷社、郡社、縣社、國社の神々の荒魂が、それ〴〵埋骨の墓所なり、塚なり等に存在しつゝあるものとす。乃至、家の神としては、先人の直靈は、先方に行き去り

二二六
たるものにして、その和魂は家の魂代、若しくは位牌に宿りつゝあると共に、その荒魂は、それ、埋骨の墓所ありて存在しつるものとす。更に、奇魂を祀りたる神社あり、幸魂を祀りたる神社あり、荒魂を祀りたる神社等あり、これ等は別著、靈魂觀に説明しあれば、渾ての詳細なることは「靈魂觀」にて、承知ある可き也、更に又高天原と云ふことは、三ヶ處あり、是亦靈魂觀に説明あり、就て見らるべし。

十二 靖國神社と一の統一體的神

靖國神社の如きは百千萬人の靈を祀りたる神社にして、日本の神社として、一種の新例を開きたるが如きも、決して然らず、人間萬有の構造は、第一生魂が主動して、百千萬の同一なる生魂を吸収す。これを八千魂と云ひ、又足魂とも云ふ。足魂とは、百千萬の八千魂を吸収具足したると云ふ意味なり。初めに第一生魂が百千萬の足魂を吸収したるが故に、その中心點に留まりて、その百千萬魂を支配統一しつゝ、茲に一の統一體を實現するものとす。その足魂の中心點に留まる處の第一の生魂を玉留魂と云ふ。玉とは魂也、魂の通音也、また略字也、魂と云ふに同じ。故に魂の中に留まりたる魂となる。これ第一の生魂が足魂の内、に留まりて主人魂となりつゝありと云ふ意味なりと知るべし。第一の生魂とは、直靈の事にして、第二の生魂とは、和魂の事である。八千魂たる足魂とは、荒魂の事なりと知るべき也。人類萬有は、悉く生魂、足魂

玉留魂として一個體を構成發現しつゝあるものである。唯其顯界のものはその質その性の粗大なるが故に肉眼に上ると雖も幽界のものはその性その質の細微なるが故に肉眼によらぬと云ふ差別あるに過ぎざる也。靖國神社の如きは即ち千百萬人の靈魂合體して生魂足魂玉留魂として靖國大神と云ふ統一體を構成發現しつゝあるものとす。尙ほ出雲大神と云へば素盞鳴尊大國主尊事代主尊(或る書に大國主命三穗津姫命を祭祀あり)の三柱より成立しつゝあるが如く何々神社何々大神と云ふ内に二柱若しくは三柱若しくは幾柱かの神を祀り主神と相背めの神との合體して祭祀せられつゝあるのと同である。唯その數に於て多きと少きとの別あるに過ぎず歸する處は同一なりとす。恁くの如く顯

界に於ても生魂足魂玉留魂より人類萬有が茲に成立し或は家庭國家として統一體を組織發現しつゝあるのみならず幽界に於ても亦生魂足魂玉留魂としてそれ統一體の神として靈顯しつゝありと自覺し居るものは世界廣しと雖も建國少なからずと雖も亦それ日本を除いて抑も何處にかあるや。

(十二) 人類萬有の同性同體と基督教の偶像身偶像天

何人と雖も自己の内底に那的か存在するを知ると共に宇宙の宏大崇高幽玄なるに俯仰しては那的かの威嚴實在することを自覺し。自己

の那的に向つては、これを稱して、心と云ひ、良心と云ひ、精神と云ひ、靈魂と云ひ。宇宙の威嚴に對しては、これを稱して、靈と云ひ、神と云ひつゝある也。已に自己の心を信じ、宇宙の神を信ずると云ふことは、人間の性情として、自ら已むこと能はざるものなると共に、已に自己に心の存在するを知り、宇宙に神の存在することを自覺する以上は、更に進んで萬有個々にも、亦その心あり、精神あり、靈あり、神あることを知らねばならぬのである。心と云ひ、精神と云ひ、神と云ひ、靈と云ひ、悉くこれ同一物にして、唯その宇宙根本大體より分派分泌したる所に過ぎず。唯その人に於て、心と云ひ、良心と云ひ、萬有に於て心と云ひ、宇宙に對して神と云ふに過ぎないのである。人類萬有は、宇宙の根本大體より分

派分泌したる分靈分魂分身なるが故に、人間のみ獨り心あり、靈魂ありて、他の萬有は心なし、靈魂なしとは云はれないのである。然るに、基督教の如きに於ては、宇宙に神在しますを知りても、その神の外には、又神あることを知らないのである。唯人類にのみ靈魂あるを知りて、萬有個々に、靈魂あることを知らないのである。已に自己に心あり、宇宙に神あることを知らば、更に進んで萬有個々にも心あり、神あることを知らねばならぬものである。夫れたい、知らず、故に神は人間のみを救ふて、萬有をば救ふと云ふ福音がないのである。萬有は、人間の爲めに造られたる食料也、資料也、器械也としてあるのである。これ人間の爲めには、難有次第なれども、動物、植物、それ自身としては、甚だ迷惑なる次第

である。神は人間のみを愛し、人間のみを救ひ、動物、植物をばこれを殺し、これを食べひ。人間の自由と自儘に放任しあるは、動物、植物等のそれ自身としては、甚だ迷惑千萬なる次第である。人間がその生を愛するが如く、動物、植物等も、亦、その生を喜び、その死を厭ふのである。恚の如く、ば基督教の所謂「イホバ」の神なる者は、その愛たゞに人間にのみ及んで、動物等の萬有には、及んで居らないのである。これその萬有個々に主觀客觀を有して居ることを知らざるより來る誤謬にして、傳來の所謂「イホバ」とは、未だ以て宇宙根本大本體の神とするには足らないのである。ほんの宇宙に神ありと云ふことを知り得たるに過ぎないのである。彼等は日本の神社を見て、偶像なりと退け、神靈の在しますもので

ないと云ふて居るのである。而して、彼等は眞の神は、天の上に在しましつゝあり、宇宙の外にありと云ふて居るのである。然れば、天と云ふも偶像である。神はどこに在しますか、見ること能はず、天は蒼々として、氣態の鬱積して、宏大崇高となり居る者也。彼等の言葉を以て言はしむれば、これ物質なり。神は、到底見ること能はざる者也。宇宙と云ふも亦、是れ偶像也。神は何處にましますか、見ること能はず。唯その氣態の鬱積して、崇高宏大濃厚幽玄たりつゝあるに過ぎず、是れまた物質也。神は、到底見ること能はざる也。然れば基督教も、亦均しく、偶像教にして、見えざる處の神をあるものと迷信して居る、これ又迷信教たるに歸着する也。人間も、亦、これ均しく、偶像也、物質也、心はいづれの處に存する

一三四
か見ること能はず、知ること能はず。見得る者は、物質のみ、知り得る者は物質のみ。人間も亦、これ偶像身として、この世を終るより外には致し方なきに至る也。ことごとくに肉迫せらるれば、彼等は偶像身、偶像教の迷信的骨頂たるに至ると共に、また一言も發すること能はざる可き也。彼等にして偶像身たる人間に、精神あり、靈魂あるを知り。大偶像天たる天地宇宙に靈あり、神あることを知るものとせば、更に進んで、萬有個々にも、亦精神あり、靈魂あり、分身あることを知らざる可からず。若しそれこれを知ること能はずとせば、彼等の信仰は、未だ以て足らざる所あると共に、彼等の究明は、未だ全からざる處あることを自覺すべし、自覺して、更にその信仰を進め、究明を進め、以て萬有個々に

心あり、精神あり、靈あり、神あることを知るまでに、進まざる可からず、究明せざる可からず。日本の村社、郷社、縣社、國社に、神靈の實在しつゝあると云ふことを知るまでに、進まざる可からず、究明せざる可からざる也。然るに、彼等の聖書なるものには、新舊二書とも、ほんの天地宇宙に神靈の在しますことばかりを知り、人間に心あり、精神あることを知りたるばかりにして、その他は、未だこの究明はないのである。況してや人間の靈魂と云ふことに就ては、何等の解釋も、唯神が吹き入れたり、信じ居る位にて、眞に以て幼稚なる申條である。奚ぞ況んやその萬有個々の靈魂に至りては、いかんぞ、これを知ることを得べきや。これ彼等基督教が日本の神社崇拜を以て偶像教なり、迷信なりと攻撃し

つゝある所以にして、恰も井底の痴蛙が大海を知らざると一般、その傲慢不敬なることを痛撃警戒せんとするよりも、寧ろその短見狹慮にして、淺薄無智なる點をこそ慙む次第である。近頃その筋に於て、吾人が豫て主張しつゝある處の神社崇拜を恰も符節を合したるが如く獎勵せられつゝあるに對し、彼等基督教徒は神社崇拜は疑問なり、迷信なりと叫びつゝありと聞く、而してこれに向つて充分なる説明をなすと共に、彼等をして閉口せしめ、首肯せしめ、更に感服せしむるものなきを歎み、本會同人來つてその説明を世に公にせんことを求めて止まず、これ吾徒同人に於ては、二十年以前より夙に唱導しつゝある所なりと雖も、その主張の廣く世に渡らざれば、この機會につれて茲に同人の求め

に應じ、廣く世に示すと云ふ。若し、それ同胞國民を初め、基督教徒等のこれを讀んでその萬一を自覺する處あるものとせば、幸也、神明の賜也。しかんぞ、感謝の念を發せざるを得んや、尙ほ佛教に對しても云ふべき處あれども、今回はこれを省略す。明治四十五年五月廿三日日本部内に於て筆記す。

(十二) 進歩的思想の無形式

一日客あり、久しく哲學を研究し、宗教を究明し、尤も近年獨逸出の汎神説を喜び、米國出のユニテリアンを好み、然かもその人の信仰より云へば汎神説以上、ユニテリアン以上の獨創的造詣あり、發明ありと公言す。

一三八
る人なり。靜に吾徒同人を難じて曰く聞か如くんば先生は尤も進歩したる宗教々々義を唱道せらるゝと。然るに今日稜威會本部を訪へば祭壇あり神鏡あり眞神あり御幣あり神酒神膳あり宛然たる古代の舊式にして尤も卑近なる偶像教なり誰れか之を見てその思想の頑固にして舊式的迷信たるに驚かざるものあらんや。今日歐米各國に於て最も進歩したる學說宗義としては此くの如き形式的宗教宗義を排斥す神と人との感應合一は此くの如き形式を用ひるを要せず必ずしも日曜毎に教會に行くを要せず教會に於て讚美歌を奏するの必要なし神社佛閣に參拜するを要せず神社佛閣に於て祝詞を奏しお經を讀む等の必要もなきなり。寧ろ教會建設の必要もなく神社佛閣建設の

一三九
必要もなきなり。此くの如きは悉く是れ一種迷信的形式にして取るには足らず。神と人との感應合一は此くの如き形式を用ひるの要なき也。我心に神を念する時は家に在りても道路を歩しつゝありても其際竊に神を念じ神を拜すべし。家に在りて座しながら神を拜するとも神は直に之を受く道を歩しながら神を念するときも神は直に格るなり何ぞ必ずしも此の如き煩瑣なる舊式的形式を要せんや。歐米各國に於て尤も進歩したる宗義學說としては斷じてかくの如き形式的宗義學說信仰思想を排斥しつゝあるを知らざる歟況してや明鏡や眞神等は偶像にして神明宿りありと思ふことの卑近淺薄にして取るに足らざることは在來の猶太教基督教回々教等に於ても千古の昔よ

りして夙に稱道せられつゝあるにあらずや。然るに何ぞ斯くの如き形式斯の如き偶像教を以て、世界の宗教宗義等を啓發統一せんとするは、愚にあらずして何ぞ、世界大勢の歸趣する所を知らざることの迂濶さは、それ亦甚だしからずや。

(十四) 無形式の自殺論

我徒同人微笑して曰く、歐米各國の進歩的思想なるものは、窃かに之を聞く、その形式的宗教宗義を排斥しつゝあることも、亦窃に之を聞く、神は始めて人間に顯はれ、人間の心裡に顯はれて自己成格を認むると云ふことも亦復、窃に之を聞く、その明鏡眞榭等の偶像にして、取るに足ら

ずとする猶太教、基督教、回教等も固より夙に之を承知す。然れども、形式論も偶像論も、未だその一を知りて、二を知らざる不明の見地に屬すると共に、彼等は皆、自身の刃を以て自身の腹に突き刺しつゝある所の自殺論者に過ぎず、足下の如きも、亦その自殺論者の相伴者なり、我徒同人、今其の解答を與へん、請ふ靜に之を聞け。足下の生命は、我徒同人の解答を與ふる間の十分間に存す、解答を與へ終るの時は、足下は直に自殺せざるべからざるの運命に接着したるものと觀念せよ、否、足下は自殺するよりも更に苦痛なる境に立つべし、自殺せんとするも、自殺すること能はず、自殺せざらんとするも、自殺せざるを得ず、生くる能はず、死する能はず、唯我一個の身を生死の間に束縛されて、如何ともすべか

らざる一大悲境に陥落するものと知れ。その際唯一の活路あり、瞎然としてその非を悔ひ改め、日本神代の御教に歸入せば、それ始めて身首を全ふすることを得べき歟。客怒りて曰くそは面白し、請ふその説を聞かん。

(十五) 觀念理想と形式

曰く歐米の學者と共に、足下は何故に形式を忌み、形式を排斥せんとするか。形式は神の發顯したる御姿にして、この形式に依らずんば神と人との感想合一すること能はざるものぞ。この形式なくんば、獨り人間の思想行爲のみならず、森羅萬有の發顯も無く、宇宙の構成も無きに

歸着すべきなり。日月星辰の運行も形式なり、地球の公轉私轉も形式なり、風雨雲烟も形式なり、花鳥も形式なり、禽獸も形式なり、山の高きも形式なり、水の流れも形式なり、詩歌も形式なり、音樂も形式なり、宇宙萬有悉く是形式にあらざる者なし。その形式を除き去るときは、その的に直に滅却したる時と知れ。この形式の高大なる程、その物の崇高宏遠なるを知るべきなり。今日歐米哲學者が、頭腦胸裡に思想する所の觀念理想は、單にその頭腦に潜め、胸底に藏め置かんとするものにはあらず、必ずや、學者の一觀念一理想は、之を社會に發表し、社會をして、その觀念を發顯し、その理想を實行せしむる丈の形式となりて、顯はれざれば満足するものにあらざるべし。此處に、一の博士あり、哲學的思想を

懐けばその一室、その書齋は悉く是れ哲學的形式に化成するなり。彼處に一の博士あり、工學的思想を發すれば、その前後左右は、工學的书齋となり、工學的器械室となり、忽にして工學的形式に化成せざるはなし。更に一の宗教者あり、その任ずる所は神にあれば、その書齋は、宗教的书齋となり、宗教的参考室となり、又直に宗教的形式に化成する者たるを
知れ

(十六) 形式と神化

その座しながら神を念ずると云ふことは、座しつつあるの形式にして、神を念じつつあるにあらすや。その歩しながら神を拜すると云ふこ

とは、歩しつつあるの形式にて、神を拜しつつあるにあらすや。座しつつ拜するの形式も、歩しつつ念ずるの形式も、神社佛閣教會に參拜するの形式も、默想默念の形式も、祝詞、讀經、讚美歌の形式も、均しく是れ形式なり。一は形式にして、一は形式にあらすとの差別、それ將た何くにかあるや。座しながら默念するの形式も可なり、歩しながら默禱するの形式も不可なし、然れども形式は、千差萬別なり、必ずしも、一の形式に依らざるべからずと云ふことなし。神を念ずることの尤も熱烈なるときは、その恭敬憧憬の念は、獨り默想默念にして止むべからず、發して祝詞ともなれば、詩歌ともなり、和讚ともなり、讚美歌ともなり、讀經ともなり、説教演説ともなり、バイブルの暗誦ともなり、講釋ともなる。是に於

てかその恭虔憧憬の念は、更に倍々醱酵醞釀して、熱烈壯大となり、神社の建築ともなり、佛閣の建立ともなり、教會の設立ともなるものなり。默念默想して、神と感應道交するが如く、詠歌讚美の間にも、神と感應道交することを得る也、神社佛閣教會に於ても、感應道交することを得る也。如何に默念默想すればとて、信なきの默念默想は、空想空念にして、神に通ずること能はず、信あるの詠歌讚美の間には、神の稜威は、その人の前後左右に天降りつゝある也。

(十七) 生死共に不可能の斷末魔

更に進んで、肉薄追究すれば、默想と云ふことも默念と云ふことも、之れ

亦形式なり。足下は歐米學者の説に心酔して、形式を排斥せんとせば、座するの形式を用ふる能はず、歩するの形式も用ふる能はざるのみならず、默想默念の形式も亦用ふることも能はざるに歸着す。座し且つ歩する能はず、默念默想することも能はずとせば、足下等は、如何にして、神と感應合一せんとするか、試みに云へ。我之を聽かん。足下若し形式を排斥するものとせば、足下の言語は形式なり、先づ之を排斥せよ、足下の身體は形式なり、先づ之を排斥せよ、足下の座する態、歩する態は形式なり、先づその起居坐臥を排斥せよ、足下の居住する家家は形式なり、之を破壊せよ、天も地も形式なり、之を排斥し去れ。汝の父母、汝の妻子、汝の朋友同胞、悉く是れ形式なり、悉く之れを排斥し去れ。汝の生は形

式なり、今我徒同人の眼前に於て排斥し去れ。汝は形式を忌み、形式を排斥するが故に、汝の天地、汝の衣食住、汝の父母兄弟妻子朋友同胞を排斥し去れ、排斥し去ると共に、その生たる形式を厭ふて、爰に自殺せざるべからざるの運命に接着したるものなりと觀念せよ。汝は、勇しく、その主張する所に殉死して自殺することを得るか。神は汝の自殺するを憐むなり、故に安心せよ、汝は自殺せずして可なり。そは、自殺と云ふことも亦形式なり、汝は死すること能はざるなり、その忌み、その排斥する所の形式をば應用すること能はざるを以てなり。神は汝の愚を憐むなり、汝の蒙を啓發し玉ふべし、故に汝を自殺せしめざると共に又汝の生を保たんとすることを懲らしむ。自殺は形式なるが故に、汝は之

れを實行せずして生を保つことを得たりと云へども、生も亦形式なり、形式を忌み、形式を排斥せんとするの汝は亦生くることも能はざるに歸着す。咄、形式を忌み、形式を厭ふの汝は、今それ死すること能はず、生くることも能はざる大危難に陥落したり。異存あらば解答せよ。我徒同人請ふ之を聽かん。解答すること能ずんば神前に拜して、服罪する處あれ。その人、顔色を變じて曰く、形式の事謹んで教を受く、始めて、我の非なるを悔悟す、然れども、偶像を拜せんとすることは、我未だ能はず、請ふ更に教ふる所あれ、教て以て蒙を啓く所あれ、果して神靈の偶像に宿りつゝあるを知らば、勇しく、參拜服罪して、大に謝する所あるべしと。

(十八) 基督教と大偶像

曰く、猶太教、基督教、回々教等の神とは何ぞや。其神は何處にましますぞ。彼等曰く天にまします所の父の神と。そも天とは何ぞや、是れ大なる偶像にあらすや。人間の高く仰ぐ所の天に、神ましますものとせば、神は高大なり、到る處に神の靈の存在しつゝ、あらざるはなきを知れ。天にまします所の神と云ふも、明鏡、眞榊に在します所の神と云ふも、御幣に在します所の神と云ふも、將た彫刻、繪畫の偶像に在します所の神と云ふも均しく是れ同一なり。天と云ふも偶像なり、繪畫彫刻と云ふも、偶像なり、彼等は蒼々たる天を以て直に神なりと信せざるが如く、御幣や、明鏡や、繪畫彫刻等を以て直に神なりとは信せざるなり。神とは天に非ず、天に在します所の神靈を意味するが如く、神とは、明鏡にあらす御幣にあらす、繪畫彫刻にも非ず、之の眞榊や明鏡、繪畫彫刻に宿ります所の神靈を意味するなり。

(十九) 神と實在

神は高大也、宏遠也、獨り蒼々たる天上に在ますのみならず、厚々たる地下にも在しますなり、山にも在ます川にも在しますなり、繪畫彫刻にも在します、明鏡御幣にも在しますなり。萬有個々の實體裡に在しますなり。神は廣大なり、宇宙萬有、臻る處に在しましたしつゝあるなり、何ぞ

獨り蒼々たる天上にのみ在しますと云はんや。神は廣大なり一莖の花にも一滴の水にも、一分の空氣原子にも神は宿りつゝあるなり。唯だ人の愚なる、その神神の在しましたつゝありと云ふことを知らざるが故に、神なしと云ふのみ。

(二十一) 神化して神を拜す

人あり若し克く自から進んで、神に合し或は神より救はれて、神となりたるときは、その人の眼には、至る所に神の姿を見、その人の耳には、至る所に神の聲を聞かざるはなく。境を異にすれば、人間相逢ふも行路の人たるが如く、境を同ふすれば、禽獸すら相和す。人間能く神境に入り

て神を呼べば、神は至る所に於て答へつゝ、顯はれ來たるなり。御幣に神の宿るを求むれば、その求むる所の至誠に應じ、神は喜んで宿り來り玉ふなり。明鏡なり、繪畫彫刻なり、その如何なる者たるを問はず、全身の至誠を顯はして、神を念ずるときは、神は颯然として現はれ宿るなり、誰れか真榊や、明鏡や、繪畫彫刻に神宿らずと云ふものぞ。明鏡、繪畫等に神宿らずば、天と云ふ大なる偶像にも、亦神は宿らざるものとなる。天に神の宿るものとせば、神は廣大なり、幽玄なり、宇宙萬有宿らざる所なきものたるを知れ。人と人と相交はるも、その體と體との相交るに非ず、相互の體中に宿りある所の直靈と直靈との相交はりなることを知らば、何ぞ萬有個々に神宿りましつゝあることを疑ふべきぞや。

(廿一) 汎神論の愚と怪疑論の獨斷

且つ夫れ、基督教、回々教、猶太教等に於ては、その宇宙萬有の根本たる靈の成格に於て、未だ明瞭なる解釋なきなり。今日進歩したりと云ふ歐米各國の汎神説も、神と云ふ成格に就ては、未だ能く明瞭なる解答を爲すこと能はず。況してや、人間個々の靈魂萬有個々の靈魂に於ては、東西古今のありとあらゆる宗義學説は、その未だいづれも、能く明瞭なる解説を爲し得たる者なし。多くはこれ、神明を以て無形と爲し、靈魂を以て無形となしつゝあるものに屬す。無形となしつゝあるが故に、目には見ること能はず耳には聴くこと能はず、體には觸るゝこと能はず

るものとなす。故に神は始めて人間に顯はれ、人間となりて我と吾が身に自からその神たるを認むるものなりと云ふが如き愚論を唱へつゝあるに至ると共に、是れ以て世界列國中、尤も進歩したるの宗義學説なりと賞賛するにも至る也。然らざれば、無形なる神の見るべからず、聞くべからず、觸るゝこと能はざるが故に、神とは人間が抱く所の一の迷信たるに過ぎざるものとする、獨斷論者、怪疑論者、無神論者等の顯はれ出るに至る所以とす。これ皆日本神代の教を知らざるに原因す。

(廿二) 神に質あり體あり形あり

抑も日本神代の教に就て、天御中主太神と靈御柱大神と高皇產靈神皇

産靈阿斯詞備の三神と八百萬神との神々等を究め來れ。神には質あり、體あり。靈にも魂にも、靈魂にも、悉く是れ質あり、體あり、形あり。唯その形や體や質や餘りに微細幽玄なるが故に人間の肉身肉眼肉耳等の荒身魂に見ること能はず、聞くこと能はず、觸るゝこと能はざるのみ。若し能く袂ぎ祓ひして、振魂をなし、鎮魂等をなし、汝の和魂を開き、汝の直靈の顯はれ來らば、御幣に、明鏡に、神の宿りつゝあることを拜みまつるべきなり。日本の神の教は、神の御姿を拜み、御聲を聞くまでに達して、初めて、人と神と感應合一したる實を顯はしたるものとする也。誰れか又神は無形なり、靈魂は無形なりと云ふを得べき。更に獨斷說怪疑說、無神說等を唱へ得べきぞや。語未だ終らず、その人竦然として顔色を變じ、貌を改め、直に起つて神前に參拜、服罪し、嗚咽泣鳴しつゝ、その罪を謝すること多時。退て同人に向ひ、謹で日本神代の教に還元することを誓ひ、世界教に歸す。

(廿三) 言語思想と形式

同人更に曰く、幸なる哉、足下、神に救はれたり。その人喜びて日暮るゝも去る能はず、更に重ねて教を乞ふ、同人曰く、形式と云へば、人々の言語は、形式なるが如く、その思想も、亦復形式なり。言語は微分子の顛動して、吾人の耳膜に通ずるものなり。質あり、體あり、形あり、唯その餘りに微細なりと云ふに過ぎず。思想は、潜んだる言語にして、我と我身に窃

に物語りつゝある所のものが思想なり。窃に我と吾身に物語る所なくば、これ思想なきなり。對手の耳膜に通ずる所の言語が、微分子の顫動にして、質あり體あり形ありと知らば、對手に聞へざる所の潜みたる言語としての思想も亦復より以上の微分子にして、より以上の微細なる質あり體あり形ありと知れ。故に曰く思想も又亦微分子と微分子との構成したる形式にして、言語も亦復微分子と微分子との構成したる形式なり、文章も事業も、社會組織も、邦家經綸も、その微分子の段々歩歩と、結晶構成しつゝ、その内容的輪廓を漸々次第と、より以上に發達膨脹せしめたる結果としての大構成大形式なりと知れ。

(廿四) 哲學の三觀佛教の三觀と幼稚

神は廣大なり、幽玄なり、靈としての活動構成あり。魂としての活動構成あり。神としての活動構成あり、宇宙の構成には、七重八重十重百重千重萬重、百千萬重の構成あり。幽なるもの微なるもの、細なるもの、顯なるもの、粗なるもの、荒なるもの、千變萬化しつゝ、あれば、主觀客觀絶對觀位にて究明し得べきものにはあらず。假觀空觀、中觀の三觀位にて究明し得べきものにもあらず。表あり裏あり、表裏一致あり。表に裏あり、表あり。裏に裏あり表あり。縦斷横截千百無量觀せずんば、その實質實體實形の全きを究明し得べきものに非ずと知れ。

(廿五) 神壇と宇宙縮刷圖

要するに、神の形式は廣大なり、幽玄なり、今我等が齊き奉る所の祭壇は、甚だ狹隘なる小室なりといへども、是れ神の大形式たる大宇宙の縮刷圖なり。神と我との餘りに遠隔しつゝあるの感あるが故に、宇宙萬有の大根本大本體たる天御中主大神と我等との餘りに距離の遠隔するが如きの感あるが故に——人間の悲しさは、時間空間に制せられて、直に神と物語りつゝあるの身にありながら、全身の八千魂の分裂に引かされて、この距離遠隔の感を抱くなり。故に近くこの祭壇に、その分靈分身を齋き奉りて、我と神との合一を念じ、神より顯はれ來て、我等を導き

玉ひ我等よりは進んで、神の攝理を自覺し、爰に神人合一の實を陶冶養成し、この縮刷圖の間に、信仰を訓練し來ると共に、更にその信仰解釋實行を擴張して、日本國家に及ぼし、列國に及ぼし、世界に及ぼし、宇宙萬有に及ぼし、以て神の大なる形式に合體せんと欲するものなり。形式を顯はし得ざるの人は、是れ人としての人の甲斐なし。形式を顯はし得ざるの家は、家としての甲斐なし。國として、形式を顯はし得ざるの國あらば、國としての甲斐なし。一代は一代として、形式を顯はし得ざるの一代は一代としての甲斐あることなし。一世紀として、形式を顯はし得ざるの形式を顯はし得ざるの一世紀は、一世紀とするに足らず。一世紀として、形式を顯はし得ざるの形式を顯はし得ざるの世界は、世界とするに足らず。我等の信仰解釋

釋行は、千古萬古、億萬古を期するといへども、一身一家一國一世界の形式を發達し、更に宇宙の形式をも發達し、神の期しつゝある所の大形式に合體せずんば已ます。子々孫々に向つても、誓つて已まざるものとす。その身、その國、その世界、乃至各界萬有とも、その分、その位置につれ、大小厚薄、長短遠近、精粗文野、高卑智愚等、差別こそあれ、人間萬有、それ何れが形式の發達、大發達を欲せざるものぞ。人畜萬有、悉くこれ根本、大本體たる大神より顯はれ出でたるものなるが故に、その大形式に神習らひに神習ひて、到頭、その大形式に合體せざれば、安心立命せざるものたるを知れ。それには、先づ祓と禊との神事を實修め、汝の眼耳鼻舌、觸胃腸肺腎肝毛骨、膈神經系等の八千魂の分裂を統一して、汝の和魂を開き、汝の直靈の顯れ來たりて、神靈の明鏡や、眞神や、御幣等に宿りまじつゝあるの御姿を拜み、御聲を聞き來れ、その人大に喜び、雄健び、雄叫び、再び蘇生したるかの感ありとて、瑞の大太前に參拜み、改めて祓と禊の實修に入る。

荒靈の鹽の八百道の八鹽道の潮の八百會に立つて我が友
 禊ぎして後の心にくらぶれば昔は我を知らずありけり
 神と念ひ神と語りて神と行く人の前には眞幸ありこそ
 國の爲め盡す誠のなき人はありてかいなき身にこそありつれ
 國の爲め世の爲め盡す誠こそ人の神たる光なりけれ
 大神の稜威と知れば月花もきのふに變はる我が眺め哉

269
632

大正元年九月十日印刷
大正元年九月十三日發行

不許
複製

發行所

著作者

定價金五拾錢

川面凡兒

發行者

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

佐原七郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地

愛敬利世

印刷所

博文館印刷所

東京市下谷區初音町
四丁目二十六番地

稜威會本部藏版

終

